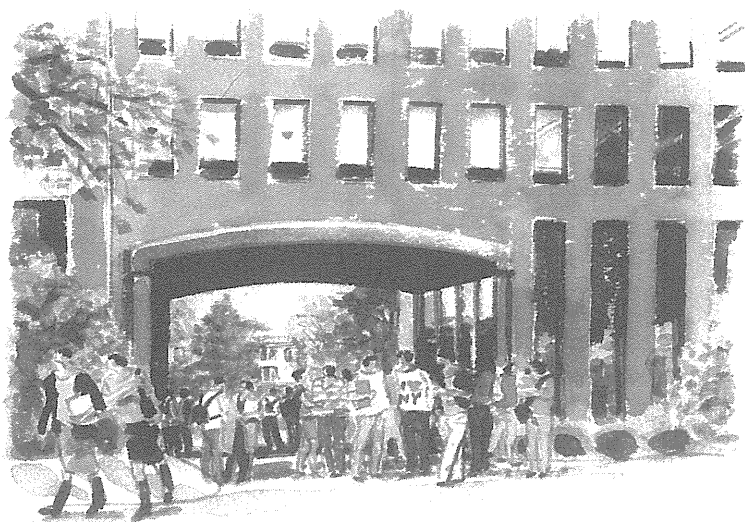


麗澤教育

第7号

平成13年（2001）3月

特集：「卒業生、麗澤を語る」



『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

麗澤教育 第七号 △目次▽

△特別寄稿▽文化功労者顕彰を記念して

歴史人口学との出会い 速水 融 1

△オピニオン▽

「激動期に挑戦する教育理念」への転換——麗澤大学の人間教育—— 水野治太郎 8

△特集▽「卒業生、麗澤を語る」

①モラロジ—専攻塾と私 畑 壽泰 15

②麗澤教育と、戦後の国際政治・貿易の流れ 町田 誠作 20

③期待される「麗澤教育」 安田 育代 24

④イタリア便り 島崎 光代 28

⑤国の姿と人の姿 杉本 隆一 32

⑥緑のじゅうたん ドレーアー・京子 36

⑦母校への恩返し 塩田 紀子 40

⑧麗澤大学と私 韓 明心 44

⑨麗澤での六年間 杉浦 優子 48

⑩麗澤大学で過ごした日本の生活	ドルジ・カルマ・ソナム	52
⑪頑張れ！麗大生	中澤 裕隆	55
⑫大場ゼミと生きること	海老原玉奈	59
特別寄稿 ― 国際経済学部近況と卒業生たちの活躍 ―	永井 四郎	64

△麗大の今▽

麗澤大学のIT環境と情報教育		
― 国際産業情報学科の試み ―	高辻 秀興・大塚 秀治	68
外国語学部における教育の情報化	長谷川教佐	80
軌跡 ― 太極拳で得たもの ―	岩佐 澄子	88
麗陵祭を終えて	紀野 篤史	93
麗陵祭に出展して ― 宮澤賢治を学んで ―	丸山ゼミ	97

△麗澤教育の理念▽

麗澤教育は、創立者廣池千九郎が提唱した道徳科学「モラロジー」に基づく知徳一体の教育を基本理念とし、学生生徒の心に仁愛の精神を培い、その上に現代科学、技術、知識を修得させ、国家、社会の発展と人類の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成する。



△麗澤教育のめざす人間像▽

- 一、大きな志をもって真理を探究し、高い品性と深い英知を備えた人物
- 一、自然の恵みと先人の恩恵に感謝し、万物を慈しみ育てる心を有する人物
- 一、自ら進んで義務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物



〈特別寄稿〉文化功労者顕彰を記念して

歴史人口学との出会い

国際経済学部教授

速水

融



二〇〇〇年のノーベル化学賞に輝いた白川英樹教授は、導電性のあるプラスチックの発見で受賞されたことは記憶に新しい。白川教授は、この発見を、たまたま実験中であつたミスから得たものである旨を語っておられた。学問の世界では、偶然や失敗が、時として次の発展や成功をもたらす好例である。

私の歴史人口学との出会いも、白川教授とは比較できないけれども、ある「失敗」から産まれた。一九六三〜六四年、私は当時の勤務先である慶應義塾大学から一年間の海外留学費用を与えられ、好きなところで、好きなことをやってこい、という幸運に恵まれた。慶應義塾大学では、なるべく若い内に、

教員を海外留学に出す制度が長くあつたが、戦争で中断し、戦後しばらく経ってから再開されたものの、留学を待つ人が多数いて、到底若い世代までは回つてこない。もちろん、フルブライトやブリティッシュ・カウンシルの奨学金を得て留学する者もいたが、その数は少なく、いつになったら留学できるのかなあと、半ばあきらめていたものである。というのも、当時、日本の高度成長は未だで、三六〇円＝一ドルの固定レート、海外渡航も自由ではなかつたから、現在とは隔世の感がある。

大学当局も、この問題を解決すべく、新たに三五歳以下の者を、各学部から一名ずつ留学に出す制度

を設けた。幸運にも、私は三五歳未満で、その第二回留学生に選ばれた。私は、どこで何をするか、ずいぶん迷ったが、ずっと近代以前の日本経済史を研究してきたので、結局、ポルトガルへ行くことに決めた。というのは、日本とポルトガルは、一六〇一七世紀に、キリスト教の布教と貿易を通じて密接な関係を持っていたからである。キリスト教布教に関しては日本にも何人かの研究者がいたが、貿易になると、後に慶應義塾大学の塾長になられ、私の学部時代の師匠である、高村象平先生の『日葡交通史』（昭和一七年、国際交通文化協会）があるくらいで、一次史料に基づく研究はないに等しかった。私は、今から考えれば、無謀にも、この課題に挑戦しようと思ひ、行く先、テーマを決めた。

もっとも、これには裏がある。それは、当時の日本の「円」はまだ弱く、大学から支給された額では生活すら覚束ない。第一、まだジャンボ・ジェット機の就航以前で、航空運賃は正規の運賃を払わなければならぬ。当時留学した人のなかには、貨物船に

乗って渡航した人も少なくなかったほどである。従って、なるべく安く暮らせるところ、ということになると、ヨーロッパではポルトガルということになる。第二に、ポルトガルならば、あまり日本から行っている人も少ないだろうから、勉強していなくてもバレないで済みそうである。そして最後に、たまたま見たフランス映画『過去のある愛情』の舞台となっているリスボンの光景や、その映画で、アマリア・ロドリゲスの歌う、ポルトガルの民謡ファドの魅力といった、「不純な動機」も決定要因の一つとなった。

近代以前の日本経済史を専攻する者にとって、海外留学はもちろん、外国行きすら当時の事情からすれば二度とないだろうと思ひ、思い切ってそれまで住んでいた住居も処分し、一日二五ドルという外貨両替の制限枠を一年分どうにかこしらえ、六三年二月、羽田からエール・フランス機に乗り、出発した。ポルトガルへの途中、「何でも見てやろう」という物好きさから、イスラムの国々を訪れ、リスボンに

は出発後二カ月経ってようやく到着した。

当時のポルトガルはサラザール政権、隣のスペインはフランコ政権が健在で、今では想像も出来ないこともあったが、ともかくリスボン大学を訪れ、古文書館に通い始めた。ところが、目指したポルトガルの海外発展史のG教授は、何と大学から追放され隠遁の身である。古文書館を訪れると、さあどうぞともてなされるが、文書はポルトガル語ばかりでなく、スペイン語、イタリア語、ラテン語で書かれていて、私の速成ポルトガル語のみでは到底歯が立たない。そうこうするうちに時間は経つし、大いに焦った。仕方がないやと思ひ、夜はファドを聴かせる店でワインを飲み、夜の明ける頃下宿に帰ったりと、あまり爽りのない生活が続いた。

夏は古文書館も閉まってしまふので、オランダ、ハーグの安いホテルの屋根裏部屋を借り、西ヨーロッパ各地を旅行した。秋になると、これでは帰国後大学に留学成果の報告もできないので何とかしなくては、という気分が強くなってきた。

もともと私が留学先にヨーロッパを選んだのは、

日本とヨーロッパの封建制の比較という課題にも関心があったからであった。たまたまりスボンにいる時、入手したベルギーのアントワープ大学のフェルリンドン教授の著作（フランス語によりポルトガルで出版されていた）に大いに共鳴するところがあった。また、アントワープ大学は、私の枕頭の書となっている、『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ』（創文社）の著者アンリ・ピレンヌが教鞭をとった大学である。かつ、これまた二〇世紀を代表する歴史家の一人、ホイジンガは、アントワープの大聖堂にかかるヴァン・エイク兄弟の「神秘の子羊」をみて、ルネッサンスは近世の始まりではなく、中世の稔りであるという靈感を得て、名著『中世の秋』を書いた。こういった歴史家たちの足跡の残るところで勉強を続けたいし、ことによったら、私も何か靈感を得ることが出来るかもしれない。

しかし、慶應からいただいた留学費は、延長滞在を許さない。そこで私は、東京で知り合ったベルギー

の外交官に手紙を書いた。出発前、私はポルトガル語をポルトガルの外交官から習っていた。東京にいるヨーロッパの外交官たち―だいたい二等書記官クラス―は、始終集まってはパーティーを開いていた。私もポルトガルの外交官―彼はその後出世してスペイン大使、国連大使になり、引退後は大学で教えている―に紹介され、何度か度胸試しもかねてパーティーに出かけたが、ベルギーのV書記官とはなぜかうまが合い、交際をしていた。そのV外交官への手紙に、率直にポルトガルでは研究がうまく行かないこと、ベルギーの大学で研究を続けたいことなどを記した。彼は偶然にも Gent 大学の出身で、同大学の奨学金をとってくれたのである。

かくして、私は慶應に留学延長を申し出て、六四年の二月からGentに移り、早速大学を尋ねたが、がっかりすることが待ち受けていた。私が師事しようと思っていたフェルリンデン教授は、研究休暇でイタリーにいらっていて不在なのである。迂闊うかつといえは迂闊だが、今のようにインターネットで状況を知

ることも出来ず、前準備のないまま来てしまったのである。

Gentは、ベルギーを二分するフランダースの中心であるが、そもそもベルギーという国が、フランスとドイツが直接国境を接するところくなことがない、というので一九世紀にできた国である。北半分が低地ドイツ語の一つであるフランダーズ語を話すのに対し、南半分はフランス語圏である。首都ブラッセルは、その境界に置かれているが、だいたい下町はフランダーズ語、山手はフランス語である。というわけで、ベルギーに滞在していると、ゲルマン文化とローマ文化の接点にいて、まさにヨーロッパを感じる。大体、「Gent」というのは、英語かドイツ語の発音に近く、現地のフランダーズ語では「ヘント」、ベルギーのもう一つの公用語（ワロン語―フランス語の方言）では「ガン」である。なるほど、と感嘆することもいくつかあったが、それだけでは留学成果の報告書も書けない。

ところが、ようやくここで流れがこちらに向いて



東京研究センターの研究員の方々と。着席しているのが速水教授

きた。フェルリンデン教授の不在中、代わって経済史の講義を担当されていたのが、ブラッセル自由大学のクレイベックス教授である（フランス語は到底カナ表記は出来ないが、無理に示すところなる）。私は教授と親しくなり、話をしたり食事をしたりした。あるときは奨学金をもらっている身として、学生食堂へ行こうとしたら、そこはお前の行くところではない、とファカルティ・クラブで食事をしたり、ブラッセルのご自宅に招待されたこともあった。

そのクレイベックス教授が、ある日、最近のヨーロッパの社会・経済史で注目を集めているのはこの著書だ、といって一冊のフランス語のモノグラフを示された。それは、ルイ・アンリというフランスの人口学者が書いた歴史人口学の方法に関する著書で、私はそれをお借りし、下宿で辞書を片手に読み始めた（この下宿は運河沿いに建てられた一七世紀の建物にあり、いくらか傾いているので、丸いものを落とすとコロコロ転がってしまう建物だったことを思い出す）。

読み始めるや否や、私はその内容に惹きつけられてしまった。ルイ・アンリは、教区簿冊というキリスト教社会にはどこにでもある史料から、そこに書かれている男女一人一人の名前を追い、洗礼、結婚、埋葬の記録を作り上げる。出生から洗礼までは、若干時間があるから、洗礼⇨出生というわけには行かないが、これはほぼ等しい。結婚はそのまま結婚とすることが出来る。埋葬は死亡を意味する。

教区簿冊は、教会の牧師によって記録されたのであるが、このように読み替え、そしてある人がいつ(何歳で)結婚し、どれだけ子どもを産み、いつ死んだか、産まれた子どもは、何歳まで育ったか、といった人口統計上の資料として利用が出来るのである。国勢調査(ヨーロッパでは大体一九世紀以降)以前、人口統計に関して、信頼することの出来る指標は求め得ない、とされてきただけに、ルイ・アンリの業績は驚嘆すべきものであり、しかも教区簿冊という、比較的残存率の高い史料によるため、多くの研究がなされるようになった。実際、私のゲント

滞在中に、当のルイ・アンリによるフランス北部、ノルマンディ地方のクリュレ教区の教区簿冊を用いた研究を手にすることが出来たし、ヨーロッパの学界は、この新しい方法による発見に湧きかえっていたのである。

もちろん、この研究には欠陥もあり、盛んに論争も行われていた。年代の上で、教区簿冊は、イングランドでは一五三八年、ヘンリー八世による修道院解散以降、フランスでは一七世紀中葉以降、ドイツでは統一国家の成立が遅れたこともあり、一九世紀になってから、というような制約がある。また、始めのころは、投入される資金、労力に対して、得られる成果が少ない、という批判さえあった。また、取扱う教区の数が少ないと、どこまで地域全体を代表するのか、という疑問も提起されていた。

しかし、日本では全く知られていない「歴史人口学」との出会いによって、以後における私の研究生活は決まってしまった。というのは、日本には、少なくとも江戸時代、非常に優れた歴史人口学の史料

がある。それまで、この史料を用いた論文も僅かではあるが出版されていた。しかし、それらは、ルイ・アンリが開発したような夫婦や個人の人口学的行動の追跡ではなく、せいぜい史料から人口趨勢や出生率・死亡率を求めるところでとどまっていた。けれども、よく考えてみると、教区簿冊に比べて、日本の史料（特に、徳川幕府がキリスト教禁止政策のため、毎年行った宗門改帳）は歴史人口学の史料として、はるかに優れている。教区簿冊では、教区全体の人口は分からないし、人口の移動に関する情報もないのに対し、日本の史料には世帯がまるごと記録されていて、居住の仕方まで読み取ることが出来る。したがって、日本の史料に、ヨーロッパの歴史人口学的手法を適用すれば、ヨーロッパの歴史人口学で得られた成果以上のことが期待できる。そう考えながら、始めの目的とは違ったけれども、自分なりに満足に行く成果を得て、東京オリンピック直前に帰国した。

というわけで、私と歴史人口学との出会いは、偶

然の重なりである。もし、リスボンで、多少なりとも成果が得られていたら、多分私の研究テーマは、宗門改帳を積極的に利用する研究ではなく、キリスト教禁止に全く逆の意味を与えていたものとなっていただろう。また、もしゲント大学で、フェルリンドン教授に師事していたら、私の拙いヨーロッパ諸言語の読解能力が妨げになって、ろくな成果を得られずに帰国していたかもしれない。こういった失敗や偶然こそ、私が歴史人口学と出会い、ともかくにもここまで来ることが可能にした最大の条件である。

そう思っているとき、白川英樹教授のノーベル賞受賞の裏にあるお話を聞き、大いに意を強くした。

速水融教授は、昭和四年生まれ、経済学博士。慶應義塾大学経済学部長、国際日本文化研究センター教授等を経て、平成七年より麗澤大学国際経済学部教授。平成一二年、文化功労者に選ばれました。

（編集委員会）

「激動期に挑戦する教育理念」への転換

麗澤大学の人間教育

外国語学部長 水野 治太郎



大学教育は今日、国内では一八歳人口の激減に伴う全員入学時代を迎え、また国際的にも激烈な競争時代に突入しています。大学のあるべき未来像を模索して、大学審議会は競争に生き残りを賭け、思い切った策を提案し、これが毎日のように新聞・テレビで報道され、恐らく全国の大学関係者は、未来を見据えてじっくりと検討する暇もない有り様だと思っています。

今回、「麗澤大学の人間教育」というテーマで執筆依頼を受けたときには、気軽に引き受けはしたものの、これまでの歴史を回顧するよりは、未来を見据えたあるべき理念を探るほうが、激動の時代にあっ

ているように思いますので、少し自らの体験をふまえながら、新たな提案を試み、批判を仰ぎたいと思う次第です。

一、「思いやり」から「対話」へのステップアップ

麗澤教育の特色は、その基礎である道徳科学が示しているように、日本のよき道徳的伝統である「思いやり・無私の精神・まごころ」のような温かな心情を中心とする精神的道徳、およびその体得実践の営みを、一つの大きいなる学問の道にまで高めた点にあります。一個の人間として、他者を思いやる温かな心情を備えることの大切さは大いに強調すべきで

す。しかし、他者を思いやる温かな心がたとえ純粹であつても、それだけで完全というわけにはいきません。それが見知らぬ人々にも理解され通じるものである必要があるでしょう。そうした見知らぬ人々との関係性こそが、現代社会に生きる者の宿命ともいえます。

まごころが見知らぬ人々に通じるためには、他者との関係を創造的に変化させる「対話」の倫理が伴わなければならぬと思います。対話の第一歩は、自分と相手の考えることを互いに、言葉や表情で表現しようとするプロセスが伴うものです。そこにはことばによる表現力という技法が伴います。かつての日本人は「以心伝心」でしたが、そうした精神主義は、言葉に表現しなくても互いに理解可能な緊密な人間関係を前提にしてきたわけですし、また少し意地悪くいえば、言葉にするための苦痛を互いに避けてきた、私的で「閉じた社会」を前提としてはじめて成立するものであったのです。しかし、たとえ未知の人々との関わりにおいても、それが一対一の

関係ならば、温かな心情・まごころは他者に通用すると思います。ところが、これが複雑な社会システムのうえで成立する公的な関係になると、言葉によって自己自身がはじめて他者の前に開示されるばかりか、互いの責任ある言葉によって成立する対話こそが、真実の意味ある世界へと人を誘い、人間性を完成させるものだといえるのです。

二、見知らぬ人々のネットワーク社会の課題

我々が生きる現代社会は、構造的にも見知らぬ人々の関係が中心になり、それが横へとのびてゆくネットワーク社会であり、無限の「開いた社会」であるわけです。すると自分の考えや相手の考えをことばを通じて理解し合うしか関係を保つことはできないはずで、意見の食い違いそれ自体は、決して平和を妨げる危険な存在とはいえず、むしろ異なった見解の持ち主だからこそ存在感があるといえましょう。

インターネットのウェブサイトで自分の名前を見てみたら、ごく最近、まったく知らない人が、以前

出版した私の著書の一冊を高く評価し、教育関係者に推薦してくれているのです。別に私が依頼したわけでもないのです。これがネットワーク社会になったということの一端を反映しているのではないでしょうか。ここでは自分の考えは言語によって無限に横へと拡大され、見知らぬ他者が対話の相手になってくれるわけです。

最近、道徳科学の授業で「がん告知」の問題を取り上げました。伝統社会の医療倫理は医師が患者を一方的に思いやるパターンリズム（道徳的父権主義）でした。あたかも医師は万能の絶対の父のように考えられていた時代が長く続きました。だから一切の裁量を医師にゆだねるといふものです。しかし、人生をめぐる人々の考えは実に多様化してきています。これまで授業でがん告知の問題を取り上げると、きまって一部の学生には、末期がんの告知の是非を医師側の一方通行的な倫理としてだけ理解しようとする意見がみられました。また反対に、患者が希望するかどうかという意思の問題に尽きるとの意見も

ありました。

しかし、日本も欧米の倫理原則である「インフォームド・コンセント」つまり、説明と同意（納得）と訳される新しい倫理原則を導入しはじめました。なぜなのかといえ、患者の価値観は実に多様化し、生命の長さだけが最大の価値ではなく、なかにはやり残した仕事を死の直前まで継続することを願う人もいます。問題は医師が患者の人生をすべて決定してしまうのではなく、患者自身が自分で治療方法を納得して選ぶという自己決定を優先する時代に入ってきたということです。たしかに医師と患者の文化背景が異なっていたら、互いに分かりあえることを前提にして医師が一方的に判断してしまうことはいかに間違っているか、理解できるはずですよ。

そこで医師と患者の対話は、いったいどのような真理を明らかにする過程であるかを検討する必要があります。この点を検討する前に、一つの経験を述べてみたいと思います。

三、対話の倫理はケアリングスピリットに依存する

古い話ですが、高名な教育学者、オットー・F・ボルノウ教授（テュービンゲン大学教授）が一九七二年に来園され、「対話のための教育」という講演をされました。教授は、ドイツ語学科の専任教員で来られていたワルター・ドレーアー先生（現、ドイツ・ケルン大学教育学部長）の恩師でした。

すでに遠い昔のことで、講演の内容はすっかり忘れてしまいましたが、自分が講演会の司会役を務めたので、当時の記録がありました。それをみると、対話することの哲学的意味と教育課題を広く深く考察したものでした。

ボルノウ教授の示唆する内容をかいつまんでいえば、「一人では正しくない。一人でこそ真理が始まる」と語ったニーチェのことばは、決して過激な発言ではない。まさしく真理はどちらか一方の側にあるのではなく、対話によって現れてくる。だからモノローグ（単独者の独話）ではなく、実り豊かなディアローグ（対話）こそ人間が到達しうる最高の成就

である。そこで対話への教育課題に全力を投じる必要があるということに尽きると言えます。

筆者は平成三年に『ケアの人間学』という著書を発刊しました。そこではケアというきわめて人間的営みを、ケアする人の一方通行的な援助行動として理解することは間違いで、ケアの内実は、ケアする人とされる人の双方向の行為として理解すべきである旨を理論化・構造化しました。その背後にある思想は、ボルノウ教授の対話教育の理論でした。ケアという営みは、相手を意識し相手から受容されることで、意欲と適切な行為が引き出されます。ケアリングスピリットは他者を意識し向き合い、対話することによって実現されます。こうしてみると対話こそ平和への道程だと考えることができます。

なぜ私がケアという行為に学問的関心を寄せるようになったのかといえば、これまでの麗澤の心は、率直にいえば、他者を思いやる一方通行的なもので、相手がそれにどう反応し、どう受容したかを無視する独白スタイルのものであったという反省に始まり



ます。相手との対話によってこそ、真理が明らかにされるという側面への配慮に欠けていたわけです。

四、対話による真理の探求

がん告知の問題に戻りたいと思います。告知というと一方通行的な宣告になりがちですが、それでは、患者が自己の病状を正確に理解したとはいえません。患者が病状を理解するには、医師の専門的知識と経験が必要なのです。医師の力を借りることで、患者ははじめて自己の病いの意味と本質に直面することができます。では告知問題が、患者の病状理解だけで済むのかといえば、そうではありません。今度は医師の側の課題を議論してみましょう。医師は病気というものの本質を、顕微鏡や検査結果だけでは知ることができないのです。病いの実体を知ること、病いの人間的理解は、患者の中に病いを位置付け、患者の痛みや内的感覚を通してはじめて、可能だといえましょう。したがって病いの意味は一定ではなくて、個々の患者によって独自の意味があるといえ

ます。

大学における学問的真理の探究の構造に関しても、同様のプロセスを指摘できるように思います。学問の手法はいまや学際的・統合的になりつつあるのですが、互いに見知らぬ研究者たちが、異質の視点をぶつけることで対話が成立し、そこに新たな視界が開けることが重要課題であるといえましょう。これは専門家たちの研究のケースですが、学生に対するときはどうでしょうか。対話というものが前者と同じ意味で成立するのでしょうか。十年ほど前に、上智大学で少人数の学会が開かれた時、科学史家の村上陽一郎氏が我々に呼びかけた課題がありました。それは「専門用語の日常化」あるいは「特殊用語の初歩的・日常的レベルからの批判吟味」という課題でした。この課題にむけて村上氏は、我々に市民大学講座を進んで担当することによって、大学人の独善性を打破できないかと主張されました。私はそれまで無視してきたコミュニケーション・カレッジの講座を受け持ち、自分なりに実践してみました。

言葉一つ一つがたしかに大変でした。日常用語で置き換え可能なものもあれば、そうでないものもあります。その経験は今日でも生きています。そしてその経験は、自分が学問的と考えてきた手法を根本から覆す力をもっていました。そこで私は、学生にとっての不可解なジャーゴン（専門的業界用語）を少しずつ排除することができているように思います。

そこからさらにいえることは、大学の研究者は学生を対話の相手に選び、すすんで自らのジャーゴンを日常言語化して、理論を組み立て直す必要があるということでした。

麗澤大学の歴史に残る「思いやり」は、こうした平和と真理探求のための対話へと組み換え可能な内容を有していると考えます。この美しいキャンパスの至るところで、対話を進めていってもらいたいと切望します。それが二一世紀のグローバル社会での麗澤大学の新たな課題であると信じています。

〈特集〉 「卒業生、麗澤を語る」

数年前、ある同窓会の集まりに参加した時、私が非常に尊敬している先輩が挨拶の中で、「学校の価値を決めるのは卒業生である」旨の話をされた。社会で大活躍されている先輩の言葉であっただけに、その言葉にたいへんな重みを感じると共に、自分自身が大いに叱咤激励されている気がしてならなかったのを今でもよく覚えている。

さて、麗澤大学はその前身も含めると、最初の卒業生を輩出してから六〇年余りが経ち、卒業生の数も累計約九〇〇〇人に達しようとしている。麗澤教育の理念や建学の精神について、これら卒業生を抜きにして語ることはできない。そこで本号においては、「卒業生、麗澤を語る」という特集を組んで、社会に出てからそれぞれの道でユニークな活躍をされている卒業生の方々に、その近況報告、母校や恩師や学友たちに対する思い、今の麗澤大学や麗大生に対して思うこと・伝えたいこと等々を自由に語っていただくことにした。

執筆者の選定に当たっては、各学科の先生方や麗澤会の皆さん、その他「物知り」の関係者等々のご協力を得ながら、卒業年度や学科別に出来るだけ偏りがないように人選をしたつもりである。紙面の都合上やむを得ないとは言え、九〇〇〇人にも達する卒業生のほんの一部の方にはか登場していただけないのが誠に残念である。

読者の皆さんには、今回ご寄稿いただいた卒業生のメッセージの中から、彼ら一人ひとりの心の中に今も宿っている麗澤魂、そして今日に至るまで脈々と引き継がれている麗澤教育の理念や建学の精神について、その本質の一端を読み取っていただけるものと思う。また、現役の学生諸君には（そして本学の教職員にも）、卒業生の母校に対する熱い思いを自らの励みとして、一層の研鑽につとめていただくよう期待するものである。

（編集委員・中野千秋）

モラロジー専攻塾と私

畑 壽 泰

(道徳科学専攻塾・昭和一五年卒・一期)



深い深いえにし(因縁)があつて、父の勧めにより私がまだ建設途中の道徳科学専攻塾に入塾したのは、昭和一〇年四月であつた。父が私に入塾を勧めた主な理由は、多くの人がいくら正直真面目に働いても、人生はなかなか自分の思う通りにならず、結局最後には滅亡、没落する運命にあることを見聞し、正しい楽しい末広がり of 眞の人生を全うせんとするには、モラロジーの教学と最高道徳の実行以外には得られないことを悟つたからである。

祖父は広島藩の藩士であつたが、明治四年に施行された廃藩置県によってその地位を失つたために、明治五年に呉服屋を開業した。所謂「武士の商法」ではあつ

たが、二代にわたり正直真面目且つ一心不乱に家業に精励した為か、運良く父は大成功をおさめた。家業は益々盛んになり、土地建物は段々と増加し、多額納税者の一員に列せられ、終には土地一流の呉服屋と称されるまでになつたのである。

しかし生来蒲柳(はりゅう)の質であつた父は、あまりに商売熱心であつた為にその無理があたり、「あなたは五〇歳まで生きるのは無理である」と医者に宣告された。父はその一言で自分の人生観の誤りを悟り、眞の正しい人生観とは何ぞや、と父なりに種々研究に励み修養もしたが、どうしても心を満たすものとは巡り会えなかつた。その後、漸く(ようやく)一二年目にモラロジーの教学に接し、

求めていた人生観はこれだ、と思わず膝を打った。そして可愛い息子に自分の苦勞の轍を踏まさないよう、丁度創設されたばかりの専攻塾に第一期生として私を入塾させ、父自身も弱い体に鞭打って専攻塾別科第三期生としてモラロジ―教学の研鑽に励み、時には大先生（廣池千九郎博士）自らのお言葉も頂戴して、益々正しい人生は如何にあるべきか、の確信を得た。

当時、大先生は病身なりにご健在で、賀陽宮殿下に前後一〇回にわたって御前講演をされた。その時偶々私は数回麗澤館に呼ばれ、宮様に差し出す御進講の原稿の清書と、和綴じの製本のお手伝いをさせて頂いた。しかしその頃、大先生の身体の状態は頗る悪く、布団に横臥されたまま、その原稿をお書きになっていた。私がそれを頂き清書すると、大先生はまたそれを訂正したり加筆したりされた。そのように推敲を重ねて完成された原稿を、私は心をこめて清書した。その時の大先生の神々しいお姿が、いまだに私の脳裏に焼き付いている。

昭和一二年、中田中先生のご指示で谷川温泉での入

湯治療を命ぜられた。しかし入浴とは名ばかりで、当時未完成だった谷川講堂やその他の施設を建設する鷺津さん（当時の谷川講堂主任）の手伝いの明け暮れで、最初の二週間くらいは治療のことなどすっかり忘れていた。それから少しの後、大先生の随行で大穴温泉、山景館にお供をした。随行員は介添えの女性二人に私を加えた三人であった。先生は宿に着かれ座敷に御座りになられるやいなや、原稿用紙へ筆でさらさらとお書きになられた。暫くすると、入浴するとおっしゃり、二人の女性が介添えをして階下の岩穴の浴室へお連れした。

先生の小旅行時の携行品は、最低六個の大型の信玄袋（幅約五〇センチ）であった。中には矢立、本漉きの原稿用紙、日用品類一式が入っていたと思う。ひとり部屋に残った私の脳裏に、急にある言葉が甦った。大先生は常々「原稿はワシの命じゃ」そして「人間は常に最悪の事態を考えて生活すれば、何が起きてても心配ない」とおっしゃっていたのである。今まさにこの部屋には先生の命とされる原稿の入った信玄袋が六つある。

あほか
恰も電撃に打たれたように、私の中に、命に代えても

これらの信玄袋を守り通してみせるといふ氣持が湧き上がった。そして、私は予想される災害を自分なりに充分に想定し、万が一にも地震や火災が起きた場合、これを守るにはどうすればよいかを熟考した。大先生の神のような偉大な品性、人格と、燃えるような情熱にじかに接した結果である。それは品性の感化力以外の何物でもなく、無為にして化す、という力に接するという大変貴重な体験をさせていただいた。お互い我々は、無為にして化す如き品性を持ちたいと、心から念願する。

さて、大先生の学校教育の要は品性教育であった。そして学生の品性を高めつつ、語学教育を重視された。当時の規則書に、入学時、卒業時、進級時には一切試験をしないと明記してある。何故試験を行わないかについて、大先生は次のように説明しておられる。

「(前略)塾長以下各講師は聖人正統の教えで、父母にも勝る親心、至誠慈悲、寛厳よろしき指導で学生の心と行いを実地に試練し、その累積が修業年限内各人の総成績となる。これは一時的、学科のみの試験によ

るよりも各人の総成績が得られる。各人は品性、人格を備えた独立人故、他から監督、試験される種類の人間とは異なる。故に学科試験のみで各人の優劣を定むる如き侮辱を、最高人格をつくらんとする人に行なうことはいたしません」

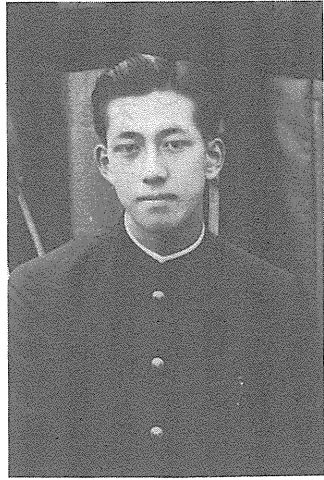
このお考えは正に大先生の教育に対する面目躍如たるものであり、私は今でも心に快哉を叫んでいる。

また、昭和二年四月一八日、賀陽宮様が、学園にご台臨になられた時、大先生は教職員、塾生全員を集められて学校についてこう語られた。

「品性を涵養することなく、知育とスポーツのみに力を入れ、学芸技術を教えるのみならば、それは学校ではなく、学芸技術の売店である。今の日本には学校は無い。みな売店だ」

では教育とは一体何かということについての大先生のお言葉が、未だに私の耳朵に残っている。

「教育とは結局、人間の人格を高めることであり、その方法は先ず人間の品性を涵養することである。その高い品性の上に、学問技術を加え教えて、その能力



道德科学専攻塾時代の畑さん

を引き出し伸ばすのが教育である。その学問知識を吸収する門戸は国語と外国語による」

そういう理由で私は専攻塾で英語やドイツ語を学んだ。このことは大先生の我々の将来を慮おもひやがられた教育方針によるものである。その後、卒業時に諸先生方から、一年間塾に残って先生方の手伝いをするように言われた私は、一年間御礼奉公のつもりで『チャールズ・ラムのウイリアム・シェークスピア』という教科書を使い、助講師として専攻塾第5期生を教え共に学んだ。

ところで昭和一〇年四月二日、道德科学専攻塾の開塾式で大先生は次のような挨拶をされ、非常に印象深く拝聴したのを覚えている。

「人間は運が悪かったならば、何をやってもつまらん。運命をよくしなければ、人間として生まれた甲斐はない。このモラロジーは運命をよくする学問である。開運の学問である。また運命は自分自身で良くしていくかなかったら、何をやっても駄目である」

そして、大先生はこう付け加えられた。

「君たちが偉いから、そして徳があるから、この学校に来られたんじゃない。皆、親祖先の積徳のおかげでここにいるのだ」

これを聞いた当時の私には、その意味がよく理解できなかったが、その後徐々に分かるようになった。八三歳の年齢に達した今、来し方を振り返り、世の中の有様を見聞し、その実態を観察し、若年の時から私が身をもって体験した事実をみると、親祖先の数々の余徳と、私自身が些いささかなりとも大先生の命に従って素直に道德を実行した結果が、今日を致していることを思わざるを得ない。

軍隊生活でも思わぬ運命にめぐり合い、生命を全うし、人類初の原子爆弾の光線を真正面から浴びながら

未だに健在で、月に数回モラロジーによる人心の開發救済のお手伝いをさせて頂いている。また、創建三九八年の胡子神社をお預かりし、その總代会会長として神社奉仕に至誠を捧げている他、神社の關係者数名と月に一度の勉強会を行っている。これらも大先生から多大な感化を受け、その胸に抱かれていたのを感じるからであり、私なりに懸命に努力を重ねているところである。

最後に、今日私が大先生のこの大恩にどうやって応えていけばよいか、自分なりに考え実行していることを記して終わりとしたい。

一、過去累代の義務弁償と伝統報恩の誠を尽くし、人心開發救済に専念し、神の慈悲心を常に堅持し人生を送ること。

二、自己の運命をよくよく自覚し、人間は欲と高慢心の塊であることを十分に自戒すること。

三、道徳の実行は自己の品性を高め、運命改善の基礎たることに確信を持ち、健康、長命、安心、平和、幸福は自然發生的なものと知ること。

四、人心開發救済は、まず家族から始め、やがて他に及ぼすこと。

五、社会より信頼と尊敬を受け、地域社会に大いに貢献すること。

六、廣池博士が一学者より出發されて、晩年に至るまでの学問及び精神的過程を詳らかに知ること。

七、モラロジーの源流たる諸聖人の教訓、教説、事跡を深く研究すること。

八、特に近年はモラロジーと宗教との關係とその違い、また真の宗教の意義をよく勉強すること。

九、道徳実行には不変と可変の原理と、九つの条件を知悉し、万全を期すること。そしてその為には、高等円満なる常識を養うこと。

一〇、平常心即最高道徳心となるよう精進努力を重ね、「無為にして化す」如き品性の持ち主になること。

一一、伝統報恩、人心開發救済は、最高道徳実行の根本義である。努々これを忘れず実行すれば、天運自ら、好運命を得ることに絶対間違いないし。

(胡子神社總代会長・元麗澤會會長)

麗澤教育と、 戦後の国際政治・貿易の流れ

町田 誠 作

(麗澤短期大学英語科・昭和三年卒・一八期)



私が麗澤教育にご縁を得たのは、昭和三〇年ごろ、佐野地方モラロジ―事務所の三好熊吉氏から、慈悲心あふれる熱心な開発を受けたお陰です。このことには改めて感謝しております。昭和三〇年三月に栃木県立佐野高校を卒業後、四月に麗澤短期大学英語科に入學しました。二年間の寮生活を過ごせたことは、色々な人格・個性のあるものどうしで「麗澤」即ち、互いに助け合う生活をする事により、学問のみならず人格形成を目指す教育方針のお陰と、懐かしく青春時代を回顧している次第です。

廣池千英学長、宗武志先生、大塚善治郎先生、米国フルブライト留学から帰国された小泉喜平先生など、

英語の勉学への向学意欲をかきたてていただいた思い出で、今でも胸が熱くなる思いです。当時は一ドル三六〇円の時代であり、海外旅行とか海外留学は、経済的にも極めて難しい時代でした。

貿易収支の面から顧みますと、次ページの表に現れているように、日本の貿易収支は、一九六五年を機に、黒字基調に転換してゆくこととなります。

昭和二〇年、日本は第二次世界大戦で無条件降伏をし、廃墟の中からの復興が平和憲法のもとにはじまりました。麗澤に進学したのも、精神的な家庭生活を實行することを目標に道徳科学を学ぶためでした。英語、ドイツ語、中国語など外国語を習得できる機会にめぐ

西 曆	和 曆	輸出額	輸入額	出入超額
1945年	昭和20年	4億円	10億円	-6億円
1950年	昭和25年	2,980億円	3,482億円	-502億円
.....
1964年	昭和39年	24,023億円	28,575億円	-4,552億円
1965年	昭和40年	30,426億円	29,408億円	1,018億円

まれていたことは、日本がその後国際化の道を進んでいく時代に大変貴重なものとなりました。中国語については、のちに北京の駐在員に内定したとき、一年弱、都内の夜学に通い、発音を中心に勉強しました。お陰様で、約三年間の駐在中、一五万キロを出張することができ、色々な方々と交流することができました。これも習得した語学の賜とします。

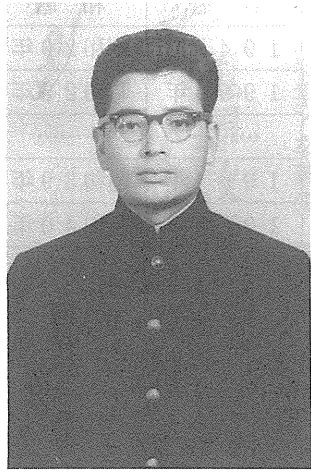
麗澤短大在学のころ、第二

外国語の一つとして中国語の科目もあり、包教授が熱心に中国語を小人数の学生に教えていました。欧米志向の強い時代で、中国はまだ一九四九

年（昭和二十四年）に中華人民共和国を成立させたばかりでした。一九五一年、国連総会で中国に「侵略者」の烙印を押し、中国向け戦略物資輸出禁止決議、コム下にチンコムを設け、GHQは対中国輸出許可制を実施しました。一九五二年「日台条約」調印、日本国際貿易促進委員会設立、北京第一次日中間貿易協定調印、一九五三年には第二次日中間貿易協定が調印されました。

中国の外貨準備高の推移は、一九七八年一・七億ドル、一九八五年一・六・四億ドル、一九九〇年一・〇・九億ドル、一九九六年一・〇五〇・三億ドル、一九九八年一・四五〇・〇億ドルと、解放政策、国際化の成果があらわれてきたのは、一九七八年（昭和五三年）以降です。

日本の対中国貿易実績は、一九九七年を例にとると、輸出が二兆六、三〇七億円、輸入が五兆六一七億円と、輸入規模が輸出規模の一・九倍と大きく、対中貿易収支は拡大しています。一九九三年以降一貫して赤字であり、赤字幅は増加しています。これは、中国側にお



麗澤短期大学時代の町田さん

ける貿易投資自由化施策の推進、これらの施策に対応して進出した日本企業の中国からの逆輸入などを反映しています。対中国投資の実績は一九九一年と一九九六年とを比較してみると九・七倍に拡大しています。日中間の経済関係の拡大に伴い、貿易、投資上の諸問題も発生しており、円滑な発展を期すべく、さまざまな定期協議の場を設け、両国間の通商政策の調整、対中投資の促進など、日中両国の諸施策につき意見交換をおこなっています。

一九八三年（昭和五八年）から約三年間、小生はグンゼ産業の北京事務所長として北京に駐在しました。一九八二年、広州での中国投資促進会議、日中租税協

定調印、一九八四年、第二次円借款決定、中曽根首相訪中など、第一次開放政策がスタートしたころ中国に駐在したことは、いま懐かしく思い出されます。

日本経済のバブル崩壊による社会的大変革への突入やグローバル化に伴って、今、日本に求められているのは、経済面のみならず生活の基礎としての文化、哲学、道徳教育などの改革と、新たな日本人・日本文化への自覚と確信、国際化への弛まざる努力、自己啓発などでしょう。

麗澤の後輩の皆さん、特に国際ビジネスの分野へ進み、貿易取引に携わりたいと考えている皆さんに、是非申し上げたいことがあります。それは、品性（人間性）を培い、語学力を磨くとともに、次の二つをしっかりマスターしておくことが絶対に必要である、ということです。

貿易取引をするにあたっては、第一に、商業英語、貿易の基礎知識、貿易管理制度、関税制度、貿易に関する国内諸法規などをよく理解しておくことが大切です。輸出および輸入の手続きの流れをよく理解し、貿

易実務の詳細としては、取引の準備、契約、決済、輸送、保険、貿易金融、税制、許認可、検査などの事前チェック、通関手続き、クレーム対策などを習得する必要があります。世界的な枠組の変化、規格の統一化、ハーモナイゼーション、知的財産権保護の強化、規制の緩和、主な海外の規格などについての知識を習得し、理解できることが必要です。多様化する貿易形態の中で、小口輸入、個人輸入など、参入しやすい形態もあります。

第二に、デジタル・ネットワークを活用することが大切です。日本貿易振興会をはじめ世界の貿易促進機関、商工会議所、官庁の許認可手続きも、パソコンを使ってできるようになりました。税関は通関情報処理システムで通関手続きをおこなっています。銀行もパソコンで外為サービスを始めており、国際貨物の運送書類も電子化が進んでいます。パソコンを使わなければ実務処理が難しくなると思われます。電子商取引も始まっており、電子化されているネットワーク情報を活用して貿易実務をおこなう必要があります。

麗大に在学中の学生の皆さん、学園生活を有意義なものにするために、教職員、来園される方々、外国からの留学生等と直接接触することにより、道徳的な精神、心遣い等の生活習慣を身につけるとともに、武道や運動を通じて健康で強靱な身体をつくり、豊かな趣味や食生活により充実した日々を過ごして下さい。求めるものが与えられることをお祈りいたします。

(元グンゼ産業(株) 取締役)

〈参考文献〉

- 一、日本貿易振興会(ジェトロ) 『貿易投資ハンドブック』
- 二、日本国際貿易促進協会 『日中貿易必携二〇〇〇』
- 三、通商産業省 『平成一〇年版 通商白書』
- 四、ジェトロのホームページ

(次のサイトには、国際ビジネスに役立つホームページへのリンクが沢山集められています。)

<http://www.jetro.go.jp/ove/yok/jetrotop/yakud>
atsulink.html

期待される “麗澤教育”

安 田 育 代

(イギリス語学科・昭和五四年卒・三八期)



麗澤瑞浪高等学校・麗澤大学を卒業してちょうど二〇年過ぎました。昭和五五年、千葉県教員として採用され、一四年間の小学校、三年間の中学校、三年間の国立婦人教育会館での勤務を経て、現在は指導主事として柏市教育委員会学校教育部教職員課に勤務させていただきます。この度幸いにも原稿執筆の機会を得ましたので、私の教職の原点ともなった体験をここに紹介しながら麗澤時代をふりかえってみようと思います。

私の大学時代は学業成績もふるわず、決してまじめな学生とはいえないものでした。教職課程を選択したもの、ただ授業を受けているうちにととうとう教育実

習(柏市立光ヶ丘中学校)の時期がやってきてしまいました。一学年の精錬授業(実習のまとめの授業)の時のことでした。多くの先生方が参観されていたので私はかなり緊張した中で授業をしていました。ある生徒を指名しようとしたのに、名前を度忘れしてしまって教室内はしばらくの沈黙…。頭は真っ白になり、ますます焦る私でした。その時「先生、がんばれ」と生徒の励ましの声。なんとか落ち着きを取り戻し無事に指名すると、今度は拍手が起きました。生徒たちは先生見習いの私が生徒の名前を思い出すまで待っていてくれたのです。「安田さんがいつも生徒を大事にしていたから、その気持ちが伝わって生徒が応援してく

れたのよ」授業後の反省会で指導教官だった大室先生がおっしゃった言葉です。こんなにすてきな生徒達と巡り合わせてもらった感激と生徒達への感謝の気持ちでいっぱいだったことを、今でも懐かしく思い出します。これを機に私の「先生になりたい」という気持ちは本物になっていきました。

大学の寮は長期の休みになると学生はみんな帰省してしまい、それは静かなものでした。私は帰省する気がゆるんでなまけてしまうような意志の弱い人間でしたから、寮に残り(当時「残寮」と言い、自炊をしなくてはなりません)、勉強せざるを得ない環境を作って教員採用試験の勉強をしました。しかし、その当時は試験に受かってでも中学校の英語教員は足りているからという理由で、正式に採用されませんでした。取りあえず講師登録をし、幸いにも卒業してすぐに鎌ヶ谷市立第三中学校、松戸市立第三中学校へ勤務する機会を得ました。教師として私が欠かさなかったこと、それはどんなに忙しくても生徒と共に清掃をすることでした。一緒に廊下を拭いたりトイレを磨いたり

しながら、授業、友だち、テレビ、趣味のことなどをよく話したものでした。もちろん私の学生時代の話も…。

一年後、小学校でなら本採用の道が開けるといふことで、小学校への異動を決心しました。中学校を去るとき、ある保護者から一通のお手紙をいただきました。「うちの子は中学になってから学校の話などしたことがありませんでした。先生が三中にいらしてから学校の話をするようになりました。安田先生のこと、『いいんだよな。ぼくらの気持ちわかってくれるんだよ』という息子のことばの中に、先生とのいい関係ができているんだなとうれしく思います」まだ新米先生だった私を受け入れてくれた彼らのおかげで、私も素直に自分の心を開くことができ、ずいぶん助けられたことを思い出します。ここでも生徒たちに感謝です。そして保護者の方々にも…。

麗澤大学での取得免許は、中学校と高等学校の英語だったため、小学校での勤務の傍ら夜間大学に通って小学校免許を取得しました。中学校勤務に未練を感じていたのもつかの間、小学生の純真な気持ちや保護者



麗澤大学時代の安田さん

の方々の温かいご理解に触れているうちに私の生きるところはここだと確信し、小学校教育に没頭しました。その一四年の間には、免許制度の改定があり、再び通信制の大学でのレポート提出とスクーリングに追われることになりましたが、同僚の先生方の励ましと援助のおかげでなんとかクリアできました。

現在、柏市教育委員会での私の主な仕事に、ALT（外国人語学指導助手）の学校派遣等の管理をはじめとし、学校における英語教育の推進とその指導があります。最近では“総合的な学習の時間”の中で、国際理解教育の一環として小学校でも英語を取り入れた教育が可能になりました。小学校教諭にも英語力が求められる時代を迎え、私の担当する仕事も多様化しています。

先日、委員会の窓口で韓国人のお父さんがおいでになりました。娘さんの高校進学の相談でした。日本語はよくわからないということでしたので私が対応しました。「あなたは外国で生活されていたのですか?」「いいえ」「どこで英語を?」「日本の学校で勉強した

だけです」「こんなフレンドリーで親切に接してくれてともうれしい。日本に来たばかりで心細かったが、あなたのような人がいてくれてよかった」と、身に余る言葉をいただきましたが「こんなことならもっと英語を勉強しておけばよかった」と恥ずかしくなりました。小学校勤務の一四年間、英語と離れていたブランクはあまりにも大き過ぎますが、こんな私の英語でも必要としていただけのことに感謝し、また勉強をする日々です。

最後に、周知のとおり、学校には困難な諸問題が山積しております。その解決のために「生きる力」心の教育が重要といわれて久しいところですが、麗澤教育ではまさにそれが団体生活という体験を通して培われたと思っています。一番多感だった高校・大学時代に、あえて親元をはなれて麗澤の寮での生活・勉強。冬の朝、バケツの水にはった氷を割って雑巾掛けをした瑞浪高校の寮の廊下や校舎まで毎日昇った三〇〇段の階段は、「辛いことに負けない心身の強さ」を、日曜日の奉仕活動は「人の役に立つことの喜び」を、時

には厳しく時には母親のように甘えさせてくれた先輩、私を頼ってくれたかわいい部屋っ子、勉強と遊びだけでなく困ったとき助けあった仲間がたくさんいた寮生活は、「助け合いの大切さと人の気持ちを大切にすること」を学ばせてくれました。だから私は私が育った麗澤のことを、同じ多感な生徒たちに胸をはって話せるのです。

最近では教え子が麗澤に進学したとか、卒業したとの報告を受けることも多くなりました。「安田先生にあこがれて英語教師になりました」という教え子たちの活躍の便りが届きます。また柏市教育委員会では、なんと教え子と一緒に仕事をするようになりました。委員会では、毎日のように「麗澤」の話題を耳にします。柏の教育界が我が母校にかける期待の大きさを感じます。うれしさの反面、しっかり仕事をしなければ…と気持ち引き締まる思いです。

最後に、麗澤教育を受けた後輩の皆さんが、教師となってその精神を引き継ぎ、いまこそ教育界で活躍してくれることを願ってやみません。一緒に頑張りましょう。(柏市教育委員会学校教育部教職員課 指導主事)

イタリア便り

島崎 光代

(英語学科・平成六年卒・五三期)

月日の経つのは本当に早いもので、イタリアに来て早丸五年半が経ちました。平成六年に外務省に入省し、その後約一年間、本省の中でEU原加盟国の政治分野を担当する西欧第一課にて実務研修をする傍ら、外務研修所での語学研修を経てイタリアに渡り、一年目は語学習得を中心に中部イタリアの中世の町の国立シエナ外国人大学にて、また二年目は同じく中部イタリアのルネッサンスの町のフィレンツェ大学政治学部にて研修を行いました。その後在ローマ日本大使館勤務に移り、二年間大使秘書として大使にお仕えした後、現在は総務班と外政班を兼任し、科学技術関係、環境、伊外交等の分野を担当しています。

大使館勤務に就いてから三年半の間、故小淵恵三前総理、河野洋平外相、森喜朗総理等、政府要人の御訪伊が相次ぎ、故小淵前総理御訪伊の際には、ご夫人の公式日程における通訳や、伊首相主催午餐会の際の堺屋太一元経済企画庁長官の通訳等も務めさせて頂きました。

また毎年国会が休会になる夏の時期には、諸案件の調査のために日本から多くの国会議員の方々がおいでになります。その際にも伊側とのアポイント先に通訳としてしばしば同行します。普段自分あまり関心をもっていない問題であっても、通訳をするとなるとある程度の事前の勉強が不可欠ですから、通訳という



在ミラノ日本国総領事・楠田正義氏と

一見機械的に思える仕事を通して私自身大変よい勉強をさせて頂いております。また様々な社会問題等について、実際の当事者から直接お話を伺えることも大変興味深いことです。

今年七月下旬にはイタリアを議長国として、北イタリアのジェノヴァにてG8サミットが開催されます。既に昨年末よりイタリア各地で同サミット関連の閣僚会合等が開催されており、二〇〇一年は大変多忙な一年になりそうです。

ここで少し麗澤大学時代のことを振り返ってみたいと思います。

私は麗澤大学英語学科在学中の一年後期から二年前期にかけて米国に留学しました。それは今思い返しても大変よい経験であり、それまで頭の片隅にも置いていなかったような外務省への就職を希望する一つのきっかけとなりました。私にとって初めての海外経験であった留学期間中、見るものすべてが新鮮だったのは言うまでもなく、米国の学生達の勉強に対する積極的な姿勢、真剣さには大変な刺激を受けました。それまでの



外務省研修所前で同期生と共に。右端が島崎さん

自分がいかに受け身的な態度で勉強していたか、いかに狭い視野で物事を見ていたかに気づくきっかけを作ってくれただけでなく、殻を破って一歩外に出ることによって、自分自身を見つめ直す大変よい機会を与えてくれました。その後就職を考えるに当たり、仕事を通して常に何か新しいものを学んでいけるような、また新しく学んだことが仕事に反映されていくような職場を選びたいと思いました。

また麗澤大学の良さの一つは、先生が学生一人ひとりに対して大変親身になって御指導下さる事だと思います。試験の僅か五ヵ月ほど前に思い立った外務省受験を相談に行った時、またその後の試験勉強の間にくじけそうになった時、いつも親身になって御指導いただいた先生方のご恩は忘れることが出来ません。休憩時間や夕方、研究室のドアをノックする私を常に温かく迎えて下さいました。

片言のイタリア語と共にイタリアに渡って丸五年半、光り輝く太陽の下で陽気に歌って、食べて、おしゃべり好きで……、という一般的なイメージとは全く別の

顔を持ったイタリアを随分垣間見てきました。時が経つにつれ様々な顔を見せてくれるイタリアについて、真の意味で懐の深い国である事を感じると共に、その背景にある長く複雑な歴史、またそこに深く根付いているすばらしい伝統や文化、そして何と云ってもそれらに対する人々の誇りの高さをつくづく感じさせられます。

また五年半に及ぶイタリア生活を通して常に感じ、是非見習いたいと思っていることの一つは、こちらの人々が常に自分の意見をはっきり持ち、それをきちんと相手に伝えることが出来るということです。それは大人だけではなく子供達にも言えることで、親は子供が幼い頃からその子の個性を認め、自分の意見をはっきり述べるよう教育し、また子供の意見を一人前の人間の意見として評価し、尊重しています。食事の場ではよく政治の話も話題に上りますが、もしその場に高校生程度の子供がいれば、親は必ずその子に対し、この問題についてどう思うかと水を向け、自分の意見を述べさせます。

国際化ということが盛んに言われている今日ですが、外に出て暮らしていますと、真の国際化の為には先ず自国の歴史・伝統・文化を十分認識し、自国に誇りを持つ事が重要であることを痛感します。こちらでは、学校でかなりしっかりと歴史教育が行われており、自国の歴史をそれぞれがきちんと認識しています。国際化の時代において、外国語をマスターする事は必須ですが、言葉は単なるコミュニケーションの手段でしかなく、その手段を使って何を述べるかが重要になってきます。大学の四年間は、特にその基礎を作るという意味においてとても貴重な期間だと思えます。何か一つに目的を定めてそれに向かってまっしぐらに進んでいくことも大切ですが、広く全体を見回すゆとりを持ち、広い視野で常に多くのことに関心を持ち続ける事も大切ではないかと思えます。

新しい二一世紀を生きる麗澤大学の後輩の皆さんが、限らない可能性と希望に向けて邁進して下さいることを心より祈念致しております。

(在イタリア日本大使館二等書記官)

国の姿と人の姿

杉本隆一

(ドイツ語学科・昭和三八年卒・二二期)

麗澤大学ドイツ語学科を卒業（一九六三年）して三〇余年が過ぎた。卒業後、学習院大学大学院で二年の学生生活を加えたので、就職は六六年の初夏だった。国が文化行政のなかで伝統芸能を正面から取り上げ、「生きている演劇（舞台芸術）」を保護し、助成し、育成しようとした第一歩の時期であった。

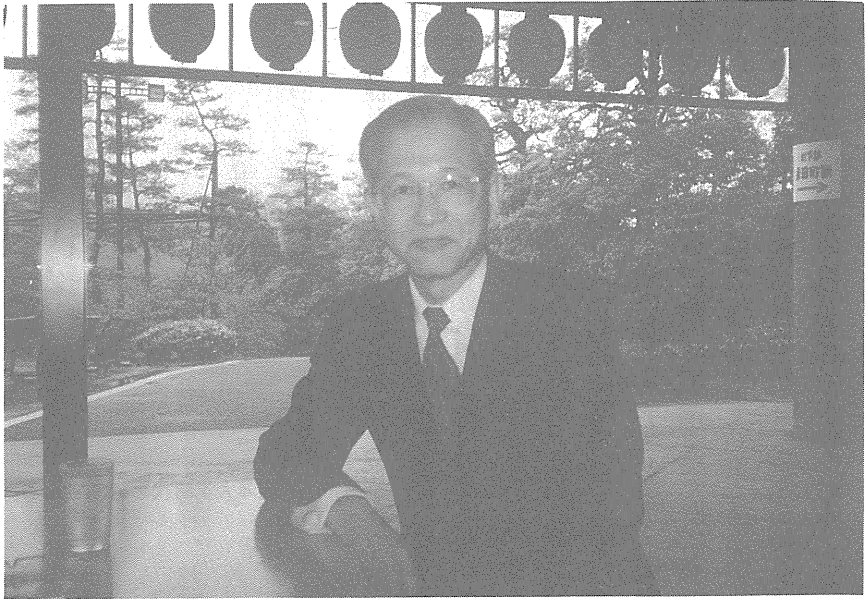
私は、既に六二歳を迎えたが、国立劇場（現日本芸術文化振興会）職員の一員として今日も伝統芸能に携わり、職域職分に微力を尽くしている。

惟^{おも}えばこの三四年間の短い年月にも国の文化行政は、その国力の充実とともに、国立演芸資料館（国立演芸場）、国立能楽堂、国立文楽劇場、新国立劇場の諸施

設のほかに、芸術文化振興基金（六〇〇億円）を創設して、民間あるいは個人が支えてきた国固有の伝統伝承芸能、あるいは明日の日本に求められる現代舞台芸術を幅広く援助するようになっていく。

将来にわたって国は、貴重な舞台芸能だけでなく、数多い無形文化財の記録保存、保護育成に取り組むと私は信じている。しかし、それも意欲ある人々あつてのことである。

地方出身で都市文化に疎かった私は、国立劇場で自分は何を求めべきかを模索した日々があった。そして「現場である舞台」を見えない力で支えている教育力に注目し、演劇と教育とは両輪の輪でなければなら



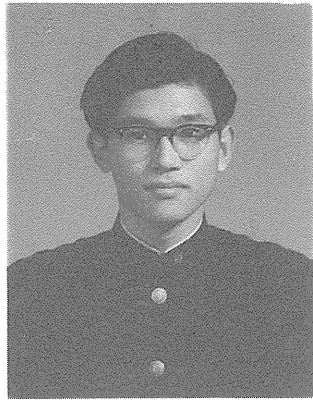
最近の杉本さん。国立劇場にて

ないと仮定し、日本演劇学会、日本教師教育学会の会員としても研究を進めた。

その成果は、九二年一月一五日付の朝日新聞論壇「演劇舞踊大学は不要不急か」の提言にまとめた。根強い反対意見にも出会ったが、それは淋しいことだった。当時、東京芸術大学学長であった平山郁夫氏も国立演劇大学の腹案を持っていたようだが、まだ、この計画は日の目を見ていない。

演劇と教育とを強固に結び付けるものは何か、学校現場でも劇場現場でも理論付けできる人はいない。できないと思われている。

麗澤大学の校舎にある「大学の道は明德を明らかにするにあり」の扁額は一方の真理であるが、今日的な意味では不十分ではないかと今、私は測おさっている。そして、このことが演劇と教育とを結ぶヒントになっていると考える。それはわが国では「徳（仁）」が絶対視されず、むしろ実学（技術・技能）を人々が重んじてきた歴史と、日本人が人知を超えた大自然と対峙してきたことに関係があるのではないか。儒教は、己の



麗澤大学時代の杉本さん

成長を促し、他人を慈しむことがない。それでは、弱者はいつまでも弱者で終わる。共栄の精神がなくてはならない。我、人とともに歩む、の精神は農地とともに生活をする人の気持ちである。人心救済は、他人のためであり、己のためである。だが、そこに実学が欠けている。否、多くの人がそれに気づいていない。語学は実学であった。実学の基であった。だが、生活に生かすことのできない技能・技術は無用の役に立たない道具にすぎない。思想（理論・イデー・法律）も同様である。地震、津波、台風、豪雨、噴火と数え上げれば数限りない天変地異、それに人心の動揺。一方は

大自然の姿であり、他方は愚蒙愚昧^{ぐもつぐまい}な人の影であろうか。私は、愚蒙愚昧^{ぐもつぐまい}の人を嗤^{わら}わない。私も地を這う^{うじむし}蛆虫^{うじむし}にすぎないから。

先人は艱難辛苦よく一時の苦難を克服し、又その修復技術を伝承してきた。歴史のある国家では当然のことである。それ以上多岐にわたる技術・技能を、人家において家伝として相伝した。家業がなんであれ卑賤視をしない国の人の誉れだと、私は思う。

教育制度は公教育によって完成している。私教育は、家庭教育が中心であるのだが、下位の教育ではないか。長尾十三二教育学博士は対座した私に述べた。二〇〇年の英知が詰まっているのだ。理屈・道理だが、私は、完璧な教育ではなかったとつぶやく。実学に偏した促成教育だったと。

歌舞伎界、舞踊界、能楽界などの子弟は成人の時期までに一通りの基礎学習をし、身体訓練を身につける。それで金の稼げる芸能人、舞台人に育っていく。多くの多彩な趣味人はこの年齢で舞台芸術の華麗さに目覚め、引かれ、学びを始める。舞台芸術に関する著名な

学者、評論家は枚挙に暇がない。

門閥だと攻撃し、閉鎖的と非難し、階級制度だと陰口を叩くが、それぞれの家で技能・技術を大切にしていなければ、人々がその技能・技術を評価し、賛美することがなければ、自然に淘汰されてしまうものだ。人は、伝承だけでなく、創意工夫を重ねて家芸に磨きをかけている。何、商売にも通じることだと、私は確信する。

歌舞伎を公演している国立劇場は、家ではないが、人がいて、組織が機能している。国も会社もそうである。でも、組織的な教育はない。教育は修了している人たちの団体だからである。

社会教育、生涯教育、企業内教育等々、便利な用語であるが、生活に根づいているとはいえない。強権をもって生活に結びつける。それは訓練であり、教練ともいえるが、強制教育（苦役、軍隊教育）である。家庭教育もときには訓練教育といえるかも知れない。

演劇学会で研究発表をした「演劇の時間空間の相关性の研究」から、演劇教育は時間との闘いであるが、

多くの教育課程も同様だと、私は思っている。語学は、特にそうだと断言したい。麗澤大学で身についたドイツ語は就職活動には無用であった。だが、学友との学びのなかに得た学習生活、学究姿勢、真摯な態度は、今に身につけていることである。

伊藤庸雄先生の一回忌が、昨年一〇月に鎌倉円覚寺白雲庵で営まれた。一月、家族と一緒に伊勢神宮に参拝した。

（特殊法人 日本芸術文化振興会
国立劇場調査養成部 主任専門員）

緑のじゅうたん

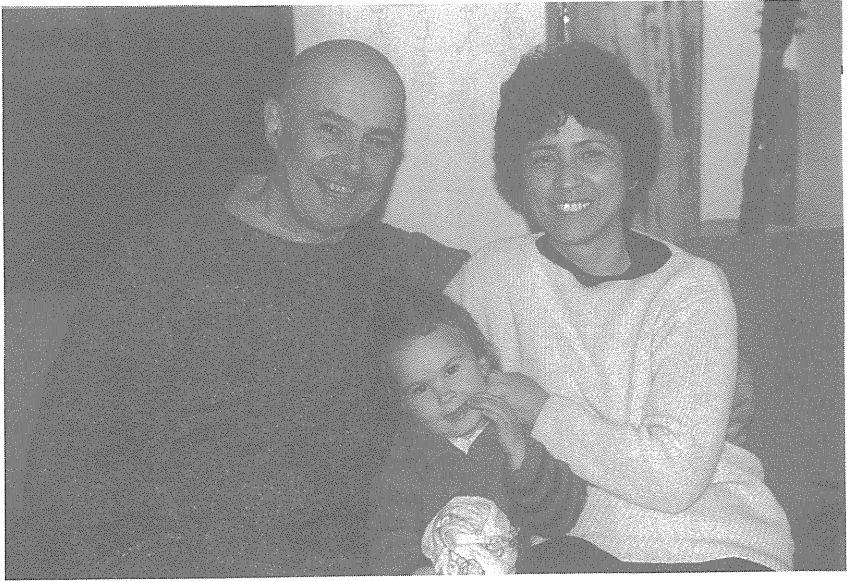
ドレーアー・京子（旧姓・仲松）

（ドイツ語学科・昭和五〇年卒・三四期）

トランク三つで始まった私たちのドイツ生活も、今年で二五年になる。今では昔の身軽さはなくなり、カタツムリが大きな家を背負ってゆっくりゆっくり歩いているような気がする。特に二年前、長女のエスタに女の子が生まれて以来、こちらの生活の比重がぐっと増した。

さて、この春はかねてより計画していた長期里帰りを実行に移した。結婚式のお祝いと、日本にいる友人達に会うのが目的である。ふるさと沖繩の家族、廣池学園に住む友人や知人、そして大学の同窓会にも出席でき、多くのなつかしい人に会うチャンスがあった。

主人が五〇歳になった時、やはり高校の同窓会が南ドイツであったのだが、レストランの部屋を間違ったと勘違いして給仕に確かめた程に皆が変わっていた、という話を聞いたことがある。私の場合は、名前こそすぐには出てこなかったが、皆の顔や所属していた学科は分かった。二五年経った今でもそれぞれの人柄は変わっていないように思え、全寮制で四年間を一緒に過ごした「仲間」の雰囲気はすぐに戻ってきた。お互いと呼び合う名前も昔のまま、いまさら〇〇さんなどとかしこまった言い方はできない。二五年という歳月をタイムスリップして友好を深めた二日間であった。主人と私にとって廣池学園が第二の故郷となっている



夫のワルター・ドレーアーさん、孫のルイザちゃんと共に

理由は、この素晴らしい人間のつながりにあると思う。

さて、ケルンの町は、ライン川をはさんで右ライン地区と左ライン地区に分かれており、私たちが最初に落ち着いたのは、ケルンの中心地から約二〇キロ離れた右ライン地区にある郊外の町であった。自然の森を利用して散歩コースにした「王様の森」には、散歩をする人、サイクリングをする人、乗馬をする人と、様々に自然を満喫する人々が見られる。また、少し車を走らせると緩やかな丘陵地帯になり、すっかりした靴と楽なズボンでハイキングをする人に出会う。ケルンの中心地へ行く為にはライン川を越えなければならぬが、高速道路を使えばほんの一五分で市内へ入ることができ、美しい緑に囲まれた環境もあって、とても住み心地のいい町であった。

この素晴らしい環境と、親しくなった隣人に別れを告げて現在の左ライン地区に引っ越した理由は、子供たちの学校に少しでも近い所に住もうと考えたからである。主人が教育大学の学生だった頃から関心のあったシュタイナー学校が、長女エスタの就学二年前にケ

ルンに新しく設立された。近所の学校にするか、それとも遠くのシユタイナー学校か、いろいろ悩んだあげく後者を選んだ。しかしスクールバスに一時間以上も揺られることを考えると、やはり学校の近くに引っ越すのが最良かと思われた。

ここベルクハイムは、以前住んでいた町と同じようにケルンの中心地から二〇キロ離れているのだが、東西でこんなに環境が異なるのかと驚いた程である。ある人曰く、ベルクハイムには褐炭の採掘所と発電所、そして緑のじゅうたんしかないのだそうだ。森も丘もなく、ただただ麦畑が何キロとなく続く様は、あたかも緑のじゅうたんを敷いたかのように見えるらしい。

引っ越した年の秋、ケルン新聞の地方版にこういう記事が載っていた。「収穫の秋、テンサイの収穫が始まりました。ゆっくり走るトラクターの無理な追い越しはやめて下さい。事故のもとです」なるほど、時速二五キロのトラクターが、テンサイを山積みしているトレーラーを二両編成で運搬するので、その後には常に車が何台も続いている。夕方ならともかく、朝の

出勤時に時速二〇〜二五キロで走ることは、とても忍耐の要ることである。それで、ついつい危険を覚悟で無理な追い越しをする人が出てくる。それを防止する為に、一〇月になると毎年この記事が新聞の片隅に載っているのはおかしくもあり、ライン川を境にした環境の違いも実感した。また、一口に麦畑といっても、小麦の他に大麦、ライ麦、オート麦がこの地域には植えられている。近くの畑を散歩しているうちに、緑のじゅうたんを作り出している一つ一つの麦の種類を区別できるところになった。

二〇〇〇年という年は様々な意味で我が家にとって特別な年となった。三月の銀婚式に始まり、四月には東芝タンガロイへの私の就職が決まり、六月には次女のおおみが高校卒業試験にパス、そして九月には主人の六〇歳の誕生日をお祝いした。誕生日パーティーには川向こうに住んでいる友人も何人か駆けつけてくれたのだが、その中の一人から、子供たちが学校を卒業したので以前の町へ戻って来てはどうかと言われた。あの楽しかった時期がそのまま戻ってくることはない



学生当時、邦楽部の演奏会を終えて。3列目の左から3番目がドレーアー・京子さん

思いながらも、独立して行く子供たちを見ていると、友人の言葉に心が動く。

ベルリン大学で教鞭をとっていた主人と同郷の知人が、引退したのをきっかけに南ドイツへ戻って行った。老後は自分の故郷で過ごしたいというのがその人の気持ちだった。主人はまだまだ仕事を続けると言っているが、折にふれ、将来どこに落ち着くかということがテーマになるのは、年をとった証拠だろうか。農耕の様子から四季の移り変わりを感ぜさせてくれたこの町に、あと何年住むのだろう。

ドレーアー・京子（旧姓・仲松）さんは、麗澤大学で教えを受けたワルター・ドレーアーさんと昭和五〇年に結婚し、それ以来ずっとドイツ暮らしをされています。夫君は、現在、ケルン大学教育学部長をされています。（編集委員会）

母校への恩返し

塩田 紀子

(中国語学科・昭和五九年卒・四三期)

現在、中国天津での一年半にわたる日本語教師としての教員生活を終えて、日本に帰ってきたばかりです。

(この原稿の話は天津にいたときに、同期で現在麗澤大学の助教授をしている黒須里美さんから依頼を受けました。同期の頼みということで、軽い気持ちで引き受けたのですが、卒業生各学科男女一名ずつの投稿ということで、かなり恐縮しています)

麗澤大学卒業後、中国語学科を卒業した私はどうしても中国に関する職につきたいと転職を繰り返して、やっと山一証券の中国関係業務に携わることができたのですが、山一証券が自主廃業となった後、やはり中国業務をとということで、しばらく中国語通訳ガイドを

していました。

中国語に関しては、それほどレベルが上がっていないということがずっとコンプレックスとしてあったのですが(大学時代の先生のご指導に問題があったのではなく、あくまでも自分の問題です)、通訳ガイドをしている時にそれがますます痛切に感じられ、もっとレベルを上げるため遅まきながら中国に留学してしまおうかなと考えていたところに、友人から中国の小学校で日本語教師を探しているという話がありました。

私は日本語教師の勉強をしたこともなく、教職免許もなかったのですが、やる気さえあればいいという中国らしいおらかな条件に甘えて(これは私立の小学



天津の小学校にて、教え子たちと

校だからできたことのようにです)、しかもお金を稼ぎながら中国語も勉強できる、一石二鳥ではないかというところで、一年半前に日本を飛び出しました。しかし、現実には甘くなく、やはり無謀なことだったと、あちらに行ってから実感しました。まず自分の勉強よりも、授業中子供をどうやって座らせておくかで毎日頭を痛めました。私は日本の子供を知りませんが、中国の子供はちょっと気を許すといわずらする元気のいい子供達で、日本でよく言われる荒れる教室という意味とはちがって、授業を成り立たせるのに苦労しました。教室で縄跳びまでされたときには途方に暮れましたが、子供達の活き活きとしてきらきら輝くきれいな瞳を見ると、不思議とやめて帰ってしまおうとは思いませんでした。授業を聞いてもらうため、子供を飽きさせない楽しい授業をしなければいけないとはわかっているのですが、物が日本ほど充実しておらずコピーもままならない中国では、授業準備が大変でした。

教えるということ、特に相手から言葉を引きだしてやらなければならない語学を教えるということが、こ

んなに大変なことだったのかとわかった時、大学時代、私たちに中国語を教えてください。くださった先生方の苦勞が初めてわかったような気がして、頭が下がる思いをしたものです。

私は在学中まじめに勉強はしましたが、決して積極的な学生ではありませんでした。当時中国語学科の先生はみな元気がよく、おもしろい先生方でしたが、私は逆にそれに気後れして、先生方に気軽に話しかけられませんでした。でも先生方になんとか自分の存在を認めてもらいたくて、必死に勉強したような気がします。その気持ちがある意味では中国語を更に上を目指して今まで続けて勉強してきた原動力にもなっていると思います。その自分の気持ちに気づいた時に、子供にとって魅力的な先生になれば、子供が私に認めてもらおうと授業を聞いてくれるのではと思って、すごい先生と思わせようと二年生とかけっこをしたのですが、なんと負けてしまいました。その時の子供の同情的な目は今でも忘れることができません。こうしてあの手この手を考えながら子供と格闘しているうちに、一年

半はあっと言う間に過ぎていきました。毎日今日も戦いに行つて来ますという意気込みで子供と真つ正面からぶつかった一年半は、とても刺激的なものでした。

こういった経験を通して、教えるということにはエネルギーが必要だとつくづく感じました。在学当時、私たちを教えてください。くださった先生方はとてもエネルギーでした。今でも会報などで活躍されている様子を見ると、相変わらずすごいエネルギーを持っていらっしやるなど敬服します。もしかしたら私が子供にした体当たり教授法も、先生方から自然に体得したものかもしれない。

当初の目的であった中国語の勉強も、ゆっくりではありましたが、日本語を教えるために日本語の特徴を見直し、同時に中国語の特徴などを考えるようになったときに、体系的に頭に入ってきました。

麗澤大学で中国語を勉強し始めてからかれこれ二〇年、他の人に比べたらものすごく時間はかかったものの、やっと自分である程度満足のいくレベルに達し、麗澤大学中国語学科卒業の名に少し恥じなくなったの



在学当時、キャンパス内にて。
右側が塩田さん

ではと思っています。

私が麗澤大学在学中は全寮制で、寮生活をしたので、今回私が赴任していた天津の小学校も全寮制でした。彼らを見ながら自分の寮生活を懐かしく思い出しました。年齢はちがうものの、寮生活の楽しさや厳しさなどは共通するものがあるような気がしました。

まだ両親が恋しい年頃の小学生達も、一ヶ月もすると学校で友達と遊んでいた方がおもしろいと言うようになります。私もそうでしたが、寮生活で生活をともにした仲間に対しては特別の思い入れがあるようです。現在、寮生活をともにした先輩、後輩や同期の友達た

ちとは、ほとんど連絡をとることはありませんが、私が天津に赴任する前にはあまり多くの人に連絡しなかったにもかかわらず、たくさんの人から励ましの手紙や電話をもらいました。みんなの温かい励ましは本当に心強く感じました。

天津の小学生の寮生活は分刻みの規則正しい厳しい生活でしたが、子供達の中でもちゃんと遊びを見つけたというたくましさを持っているのを見て、自分もきっと寮生活でずいぶんたくましくなったのだろうなと思ったりもしました。

現在、麗澤大学は私の在学当時に比べると、見違えるほど大きく立派になりました。在学当時の少人数でアットホームな雰囲気がなくなってしまったのは少し寂しい気もしますが、自分の母校が発展していくのはやはりうれしいことです。少し自分に自信ができて、やっと胸をはって「麗澤大学卒業です」と言えるようになった今、私はかなり遅ればせながら、これからやっ

と母校に恩返しが出来るのではと思っています。

(元日本語教師)

麗澤大学と私

韓^{ハン}明^{ミン}心^{シン}
(日本語学科・平成六年卒・五三期)



一九九〇年度に、麗澤大学の日本語学科に入学して、それから数えて、はや一〇年の歳月が流れました。卒業後は國學院大學大学院文学研究科(古典文学)の修士課程を経て、今は博士課程の単位修得の後、博士論文の執筆に余念のない毎日を過ごしています。そして思いがけず昨年度より、母校で非常勤講師として、日本文学関連の講座(平家物語)を担当させていただいております。

ところで、大学に入学した当初は、まだ外国語学部だけでしたので、学生数も千人に満たない、家族的な雰囲気のある大学でした。私は日本人の学生より一回り歳の差がありましたので、大学生活がスムーズに送れる

(かどうか、不安な毎日だったのが思い出されず。でも、入学式の後の谷川での合宿で少し不安がなくなりました。先生と学生たちとのふれあいは、三日間という短い期間でしたが、日程が終わって帰るときは皆と仲良くなっていました。一番印象に残るのは、日本という裸の付き合いができたことでした。浴場で日本人と留学生が十人ほど、朝方まで人生の話などいろいろな話をしました。その場にいた学生たちとはすっかり仲良くなり、まるで姉妹のような関係の中で楽しい大学生活が始まりました。

それに、一年生は全寮制だったので(留学生は自由選択)、日本人と触れ合う機会は今より濃密だったよ

うに思われます。さらに、中国人とか台湾人とかブータン人の方々と友達になり、小さな国際社会の一員になったような感じでした。今の時代、国々の国際化が進むにつれ、その分摩擦も多くなったようですが、麗澤大学では国籍を問わず、ごく自然にまわりにいる方々と友達になれました。卒業する時には、全員が国際人になっていたといっても過言ではありません。

麗澤大学はアカデミックな大学です。大きな大学に負けないくらい授業科目もたくさんあり、内容も多彩で、好きな科目がたくさんありました。少人数の授業が多く、理想的な大学だと思いました。集中講義の講座も充実していて、学生は幅広く学ぶことができました。今は麗澤大学にいらっしゃる野林正路先生の授業も聴くことができました。言語学を勉強している韓国人には知らない人がいない、著名な梅田博之先生の授業も聴くことができました。高橋太郎先生には本格的な研究方法も学びました。フィールドワークの言語学の授業やコンピュータで日本語の教材のプログラムを作る授業など、斬新な授業も多くありました。漢文と

か古典の輪読会もありました。今私が、古典文学の勉強を続けているのは、安藤靖治先生の源氏物語の輪読会に参加させていただいたおかげです。とくに坂本比奈子先生には、学問を続けるうえで、先生としてだけでなく、女性の大先輩としても勇気づけられました。

また、先生方の熱心さには感服しました。例えば、田中駿平先生の英語の授業ですが、授業中に使うテキストの他に短編集の本がありまして、自分で毎回一課ずつ勉強して来て、内容に関する小テストを受けます。先生は毎回採点してくださるのです。大変なことだと思います。点数の付け方がまたおもしろいのです。私の日本語はあまり上手ではなかったので、成績をつけるとき日本語力を考慮してくださったと思われませんが、ところどころ点数を直されたところがあります。先生の気持ち伝わり、胸がきゅんとなりました。歴史の櫻井良樹先生のテストも同じく点数が直されていたところがありました。戸田昌幸先生の日本語関連の授業も同じです。毎回学んだところを小テストにします。おかげさまで、今でもほとんど覚えていきます。



在学当時、キャンパス内にて、先生や友人とともに。
右から2番目が韓さん

ひとつひとつ書こうとすると紙面が足りなくなり
ますので、これぐらいにしますが、ほんとうに先生方の熱
心さには頭が下がります。教壇に立ってみて、先生方
の大変さとありがたさが、いっそう身にしてみても
わかるようになります。

教務課や学生課などの職員の方たちも、みな親切で

よくしてくださいました。また、国際交流課にはずい
ぶんお世話になりました。わが家のようにしょっちゅ
う寄らせてもらいました。家族のように面倒をみてく
ださいました。稲津寧子先生は母親のようにみんな慕っ
ていました。大学院を受験するとき、元国際交流課の
水野治久先生は親身になって大学院についてアドバイ
スをしてくださり、大学院での生活に大変役立ちました。

麗澤大学は留学生の多いことで有名です。日本人の
学生はおとなしく、どちらかと言えばシャイな方が多
いので、留学生と親しくなれるまでには時間がかかり
ます。外国人の場合も日本に来てあまり長くありません。
言葉もまだ不十分なので、日本人との付き合い方
にもあまり慣れていません。最初は歳の差とか習慣の
差などがありますので、お互いに戸惑いがあるかもし
れません。慣れるまでは大変ですが、慣れてしまえば
それからは楽しさがどんどん増えていきます。せっか
くキャンパスのなかでいろいろな国の外国人と会える
のですから、積極的に友達になりましょう。大学での
異文化体験は、これからの人生においてきっと貴重な

ものになると思います。

日本には留学生のほかに仕事等で滞在する人がたくさんいます。長期にわたって滞在する人も毎年増加する傾向にあります。留学生に限らず、日本語の上手な外国人もずいぶん増えました。仕事で日本語を使いますので、学生よりもっと正確にきれいな日本語を使う人も大勢います。留学生の中でも日本語関連学科以外の学生で、日本語のほかに専門分野を有する人も多くなりました。これに対して、日本語学科の留学生は日本語が専門分野です。仕事で来ている人、専門分野を別に持っている人より優れた日本語力を持っていないと、日本語学科に入った意味があまりないのではないかと思います。まず、もっと正確な日本語を自由自在に使えるようにし、それに他の分野の人にはないもう一つの能力を養ってほしいのです。また、日本人の学生には、日本人としてのプライドをもって、外国人に美しい日本語や日本の文化を伝えてほしいと思います。麗澤大学では先生方はもちろん、まわりのみなさんも大変親切で優しいと思います。学生たちは卒業して

はじめて、世間の冷たい風にあたります。卒業後、上手に新しい生活を営む人もいますが、苦勞をする人も多いのです。とくに留学生は苦勞する人が多いようです。同じ日本でもみんなが優しくしてくれる訳ではありません。卒業した後、大学時代はよかったと皆口をそろえて言います。私も、最初に出会った日本が麗澤大学でよかったと、卒業してからつくづく思いました。故郷のような温かさにつつまれた大学で四年間を過ごせたおかげで、今も日本で元気に頑張ることができるとだと思えます。

麗澤大学の卒業生としてのプライドは、今日までずっと私に勇気を与え続けてくれたように思います。感謝の気持ちでいっぱいです。これからも麗澤大学で学んだこと、日本で学んだことを生かして、微力ながら国際人の一員として活躍できるように、頑張っていきたいと思えます。麗澤大学に心からの感謝を忘れず、そして母校がいつそう発展されますよう、お祈りいたしております。(麗澤大学外国語学部非常勤講師・韓国籍)

麗澤での六年間

杉浦優子

(日本語学科・平成一〇年卒・五七期)

私は現在、タイ国立タマサート大学教養学部日本語学科で、常勤講師として日本語を教えています。タイは六月が新学期で、私は二〇〇〇年度の六月から勤務しています。この原稿を書いている現在一二月は、一〇月の雨季休みが終わり後期が始まったばかりです。

〇月の雨季休みがなくなり後期が始まったばかりです。休み中は学生に会えなくてつまらなかつたので、久しぶりを見る学生に思わずこちら胸をはずませてしまっています。

この原稿の依頼をうけて、自分の学生生活を振り返ってみると、思った以上に楽しい思い出ばかりであることに自分でも驚きます。

私が麗澤大学での学生生活で得たものは、たくさん

の知識と経験です。あたりまえといえばあたりまえのことですが、こうはっきりと答えられる学生生活を送れる大学は少ないのではないのでしょうか。

七年前、なんとなく日本語の先生になりたくて日本語学科に入学しました。日本語の先生になるのにどのような知識が必要なのかまったく知りませんでした。語学の授業はとも興味深いものでした。教育学もさることながら、入学前はそのような学問があることさえ知らなかった言語学に、私はとても惹きつけられました。それで、三・四年の時は言語学系のゼミに所属しました。他にも比較文化や民俗学など、諸先生方の授業は私の知的欲求を満たして余りあり、あれも知



タマサート大学にて、教え子たちとともに。左から2番目が杉浦さん

りたいこれも知りたいと、私の知りたい欲はどんどんふくらみました。また先生方の授業を聞きたいと、卒業した今でも思います。

それらの学問とは別に、私は六年間を通してタイ語の勉強に夢中になっていました。関東地方には日本語学科がある大学がいくつかありますが、私が麗澤大学で勉強しなかった一つの理由は、第二外国語でタイ語が勉強できると大学案内で読んだからです。勉強という言葉にはなんとなくつらい、苦しいというイメージがありますが、タイ語の勉強はとにかく楽しくてしようがありませんでした。そして三年生の後期には交換留学生としてタイ国立ソクラーナカリン大学へ留学しました。タイの学生と同じ制服を着て、同じ寮で寝起きしました。楽しいこともつらいこともたくさんありましたが、タイについて、日本について、そして異文化について考えるいいきっかけになりました。

また、その大学はタイの南の方にあり、その地域は人口の八〇%以上がイスラム教徒という、タイのそこ以外の地域とはかなり違った特徴を持っています。南

タイは治安があまりよくないと言われていて、タイ人でもあまり行きたがりませんが、大学のなかは安全でした。そのようなところで半年間過ごしたのはとても貴重な経験だったと思っています。

もう一つ学生生活で忘れられないのは、同級生や先輩後輩との交流です。毎年秋に行われる学園祭では、所属していた茶道部から出店してお茶を点てたり（点てたお茶を運ぶ係りでしたが）、学科から和食軽食処を出店したり（この手作りどらみや巻きずしは飛ぶように売れました）、タイ語を勉強している人達とタイ料理店を出店したり（タイ人と間違われました）、毎年違う立場で参加して十分に満喫しました。

また、日本語学科は約半分が留学生なので、留学生と親しくなり、自然と異文化に接する姿勢を学びました。特に私は韓国人の留学生と親しくしていましたので、韓国のことについても興味を持ち、二年生の夏休みには韓国へ旅行に行きました。その友達はいろいろなところへ案内してくれました。とても大切な思い出です。

これらの体験は、自分の五感を通して身にしみえます。本で読んだり、写真、ビデオで見るのとはやはり違います。入学前は甘口のカレーも食べられないほど辛いものが苦手でしたが、今ではかなり辛いものでも平気です。辛いものが食べられないと韓国料理・タイ料理は味わえないので、特訓しました。

入学前の私は、外国と言えばアメリカ、ヨーロッパしか浮かびませんでした。大学で多くのアジアからの留学生と接して、自然とアジアへ目が向くようになりました。アジアへ目が向くようになると、日本人であるということ、良心が痛むこともないことはありませんでしたが、それはそれとして、一緒に勉強している留学生達と友人になれたことを嬉しく思っています。このようにして四年間を満喫した私は、卒業後タイに行って日本語教師の職を探すつもりでした。そのことをある先生に話したところ、将来的にずっと日本語教師をやっていくつもりなら、修士を持っていたほうがいいというアドバイスをくださいました。確かに私も、もう少し勉強したいと思っていたところだったの

で、両親にあと二年、学生を続けさせてもらえるようお願いし、無事試験にも合格して、もう二年麗澤の大学院で勉強しました。

学部では言語学と主に日本語学を学びましたが、院では日本語教育学とタイ語学、日タイ対照言語学を学びました。学部で学んだことを基礎として、院ではより深いことについて学ぶことができ、とても有意義でした。

さすがに二年目は修士論文を書かなければならなかったのですが、とてもストレスがたまりました。それでも乗り切ることができたのは、タイで日本語教師をするという具体的な目標があり、それに向かって着実に進んでいるという自信があったからだと思います。

今私が勤務している大学に採用された時、私を含めて四人の先生方が同時に採用されましたが、教師の経験が全くないのは私だけでした。どうやらタイ語が話せるという点を買って採用してくださったようです。タイ語を勉強して本当によかったと思いました。

現在も日々勉強中ですが、在学中に学んだこと、経

験したことはすべて役に立っています。

また、最近、学部の時の同級生の間でメーリングリストができ、いろいろなところでいろいろな仕事をしている人達と情報を交換し合い、とても励みになっています。

麗澤大学の日本語学科の先輩達や麗澤に留学したタイ人の留学生たちが、タイで日本語教師として活躍されているおかげで、タイの日本語教育界でも麗澤の名前は知られていると言えます。私も後続のものとして、精一杯がんばろうと思っています。

(タイ国立タマサート大学教養学部日本語学科講師)

麗澤大学で過ごした日本の生活

ドルジ・カルマ・ソナム

(別科日本語研修課程・平成六年卒)
(国際経営学科・平成一〇年卒・五七期)



◎現在の仕事について

一九九八年の三月に麗澤大学を卒業し、帰国後、国家試験を受け、現在母国の通商産業省で商業部の外部商業で仕事をしています。外部商業では、我々はブータンとその地方、そして海外貿易に関する仕事をしています。私はこの仕事に入ってから、もうすぐ二年が経ちます。振り返ってみれば麗大を卒業してもう二年も経ちます。たまに自分の学生時代を思うと昨日のようで、時間が過ぎるのは早いのだなと思います。

私は、初めて仕事に入った時は、一面ですごく嬉しかった。なぜなら自分が思うとおり、自分の興味がある所へ入ったし、社会人になったからです。しかし、

一面では少し悲しかった。なぜなら、のんびりとした学生生活、そして友達と一緒に楽しんだ日々が、これからはないからです。だけどこれも人生の一つの役割だと思っています。

私はブータンと海外に関する仕事をしたかったから、今の仕事を選んでよかったと思います。最初に仕事に入ったとき、私は後輩だったから、いつもたくさんの仕事をやらなければなりません。そのときは自分がこの仕事を選んで間違ったかなと思ったりしました。今は、そうは思わない。それよりも、この仕事からいろいろなることを勉強しています。この仕事は私にとってすごくやりがいのある仕事です。自分の仕事を

選ぶときは、自分の一番興味がある、そして一番やりたい仕事を選ぶのは大事なことだと思います。そうすれば、どんないやなことがあっても、自分の仕事に對して、満足な気持ちを保つことが出来ると思います。

◎ 麗澤大学の思い出

麗大の思い出は、私にとって一生忘れられない思い出です。私が九三年に麗澤大学の別科日本語研修課程の学生として初めて日本へ来た時、私は日本のことについてあまり知りませんでした。私は高校を卒業したばかりだったので、少し緊張と心配をしました。だけど、麗大で皆が私を留学生だと理解してくれて、優しくしてくれました。

もちろん問題もありました。それは日本の言葉でした。私が初めて日本に来たとき、日本語は全く話せませんでした。半年間ぐらい、寮で日本人学生と一緒に住んでも、話すのはすごく大変なことでした。しかし、麗澤のホームステイプログラムによく参加したので、日本語も上達していきました。日本の文化や習慣につ

いても、よく分かるようになりました。日本の学生、そして他の国から来る留学生と出会い、別科生として過ごしたその一年はすごく楽しかったです。毎日何かを学び、体験する日々でした。

別科日本語研修課程を卒業して、麗大の国際経済学部・国際経営学科一年生に入った時、大学の日本語は専門用語をたくさん使っていたので、私には最初の頃、少し難しく、たまに辛かったです。時には辞めようと思うこともありましたが。しかし、辞めたら亡くなった父の夢を実現することが出来なくなるし、自分もそのことでいつも不満を感じてしまうと思いました。先生方、先輩そして友達への忠告と応援で、がんばって続けることが出来ました。

大学二年、三年そして四年になっていくうちに、大學生活にも慣れてきたし、楽しくもなってきました。ゼミ合宿に行ったり、コンパに行ったり、大学祭に参加したり、友達と一緒にカラオケに行ったり、休みのときには知り合いのところにホームステイしたり、日本の家庭生活を体験しながら文化の交流をしたり、国



学生当時、女子寮にて。前列右端がドルジさん

際交流のイベントに参加してブータンのことを紹介しながら、私は大学をあとという間に卒業したような気がします。

今、私は麗澤大学で過ごしたその五年間を振り返っ

てみると、すごく懐かしく思います。私は麗澤大学から、ただ経営学士の証明書だけを受け取ったわけではありません。私は麗大で日本の生活観や文化を体験することができました。日本に留学して、自分の国ブータンの文化や習慣の良さもよく分かるようになりました。自分は、がんばればできるという自信を持つようになりました。これは今でも私にとって、仕事に役立っています。

私が今の麗大生そして卒業していく学生に言いたいことは、自分に良いことがあっても、どんなに辛いことがあっても、自分に自信を持って自分が一番やりたいという夢に向かってがんばっていけば、いつかきっとその夢を叶えることができるということです。それが日本で五年間過ごし麗大で勉強して私が思ったことです。

最後に、皆さんもそれぞれの夢を叶えられますように。BEST WISHES & GOOD LUCK !!

私の母国語でこうと『TASHI DELEK』。

(ブータン通商産業省商業部)

頑張れ！麗大生

中澤裕隆

(国際経済学科・平成八年卒・五五期)

私は高校生の時に政治家になりたいという夢を持っていました。平成元年に麗澤高校を卒業し、その後三年間の浪人生活を経て、平成四年に国際経済学科一年生として麗澤大学に入学しました。大学卒業後、モラロジー専攻塾に進学し、その後、財団法人モラロジー研究所に籍を置き、平成一年に、麗澤OBを中心に多くの方のご支援をいただき、最年少柏市議会議員として当選させていただきました。

ここで市議会議員という仕事を紹介しながら、私の近況をご報告申し上げたいと思います。意外にも知られていないことですが、議会は毎日あるいは毎月行われているわけではありません。基本的に議員として議

会に出席をしなければならぬ期間は、三月、六月、九月、一二月の年間四ヶ月です。この期間に行うことは大きく分けて二つあります。

一つ目は、市長からの提出議案（予算・決算、市立学校の管理運営、市条例の改正等）や市民の方から寄せられる請願・陳情（道路・公共施設の改修、学校教育の改善、環境保全等）を審議します。二つ目は、議員が市政のチェックを行ったり、市長に政策などを提案することができると、行政評価システム（市が行う場合を例にとりますと、行政評価システム（市が行う事業を点数化し、無駄がないかどうか客観的に判断するシステム）の導入や情報公開の促進、子育て支援策



柏駅にて、1999年8月の選挙での街頭演説

の拡充、地方分権時代の住民参加型行政システムの構築などを取り上げました。

また、議会のない月は、地方自治に関する勉強会、町会などの地域の会合、若者によるまちづくり活動の一環として青年会議所等に積極的に参加し、市民の市政全般に関するご意見を吸収できるよう努めています。この他にも、入学式、卒業式、運動会、冠婚葬祭、各種審議会、記念式典等々に出席します。また、現在は教育経済副委員長に選出され、議会内においても責任のある職をお任せいただいています。このこと

はまた後でふれたいと思いますが、大学生活で学んだことが非常に役立ったように思います。今日の私があるのは、素晴らしい恩師と友人達との出会いのおかげです。そんな私が学生時代何に興味を持ち、どのようなことを考えていたかを恥ずかしながら披露することにより、あらためて在校生へエールを送りたいと思います。

私は在学中、学友会活動に熱中していました。理由の一つは、年々学内がタバコの吸殻や落書きで汚れていくことが残念でならなかったためです。もう一つは、麗大生として麗大に誇りを持ちたかったためです。少し大きな気もしますが、学生が誇りの持てる大学にしたかったのです。麗大の特色は今も昔も少人数教育にあります。少人数制のために、学内には他の総合大学に比べるとイベントや施設は少なく、メディアへの登場も多くありません。しかし、先生方とのふれあい、友人同士の仲間意識などは、マンモス大学では絶対に真似のできないメリットだと思います。

また、麗大の最大の特徴は、教科の教育のみならず、人間教育に力を入れている点にあります。人間教育と

は道徳科学の授業のみならず、師弟関係や先輩・後輩関係など、学内にある伝統的な雰囲気です。この人間教育の効果は社会に出てみると実感しにくいことです。しかし、麗大の伝統である礼儀正しさは、いつの時代でも、どこの社会に属しても、基本的マナーとして非常に重要なことだと思います。挨拶、敬語の使い方は必ず社会で役に立ちます。特に挨拶の重要性は、皆さんが思っている以上に重要なことです。極端なことを言えば、私は挨拶のお陰で政治家としての第一歩を踏み出すことができたと思えます。このような麗大の伝統は、時代や社会環境がどのように変わろうとも、守っていただきたいものと思います。

次に、多くの学生が一度は思うであろう「大学がつまらない」という意識について、意見を述べたいと思います。私が入学した当時、多くの学生がイメージするキャンパスライフと麗大のそれとは若干のズレがあり、「環境はいいが、つまらない」といった声をよく耳にしました。私は、長く浪人していたせいもあり、とにかく大学生活を充実させたいという思いが強かつ

たことを思い出します。当時、国際経済学部が開設されたばかりで、学生数も少なく、学内にあまりサークルがありませんでした。そのため、サークルがないことで麗大がつまらないという声も聞かれました。私は、サークルがなければ作ればいいと単純に考え、クラスメイトを三〇人ほど誘い、皆でサークルを作りました。そのおかげで、多くの友人ができ、海外旅行など多くの楽しい思い出ができました。

考えてみれば「大学がつまらない」という言葉には、「大学は楽しいもの」という前提があるのではないのでしょうか？ あるいは楽しみは与えられるものと無意識に思い込んではいないのでしょうか？ 結論からいえば、大学は確かに楽しいものです。しかし、重要なことは、「楽しみ」は自ら作り出すものであるということです。こういった自助努力の経験は、社会人となつた今でも役に立っています。

最後に、在学生にぜひ知っておいていただきたい言葉、初代国際経済学部長をされた私の恩師、小松雅雄先生の言葉を紹介します。先生は私たち学生に「プロ



学生当時、サークルで伊豆の温泉へ。中央が中澤さん

ファッションナルは常に少数である」ということを度々おっしゃられました。そこにはひとつの道に精通することの厳しさと、現在の大量迎合主義的な社会への警鐘がこめられていたように思います。だからこそ、麗大生には専門知識はもとより人間として様々なことを吸収し、公私の分別のつく立派な人間に育ってほしい、あるいは知識に裏付けられた正義を、たとえ少数になっても貫く人間的な迫力を、小松先生は私たちに求められていたのだと思います。

私は大学時代決して優秀な学生ではありませんでしたし、社会人としても政治家としてもまだまだ未熟な人間です。しかし、大学時代に多くのことを学び、何よりも強く愛校心を持ったことが、今日の私を築いたと思います。麗澤大学には、人間として成長していく上で、様々なチャンスがあります。私も麗澤大学卒業生として恥ずかしくない人間になるよう努力し続けまします。在校生の皆さんも、たとえ途中には困難が待ち受けていても、将来の夢や希望に向かってあきらめず努力し続けてください。

(柏市議会議員)

大場ゼミと生きること

海老原 玉 奈

(国際経営学科・平成九年卒・五六期)

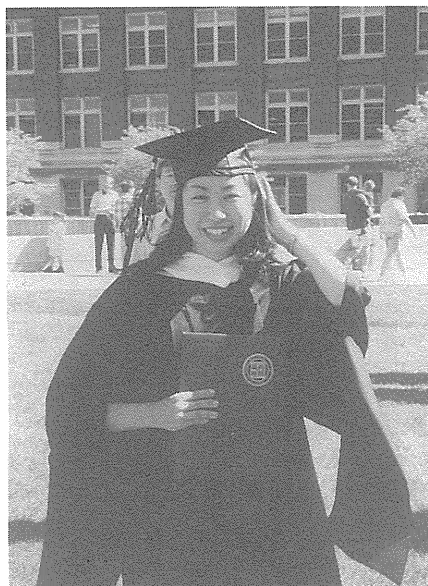
三年間のミネソタ大学大学院での留学を終え、私は日本に帰国した。余韻に十分に浸る間もなく就職し、四ヶ月が今経とうとしている。自分には不可能と決めつけていたラッシュ時の電車通勤や典型的な日本のオフィスでの仕事にも慣れてきている自分がいる。また日本の生活に慣れてきているのと同時に、ミネソタでの日常を非常に恋しく思う自分もいる。家にはまだ開けていないミネソタから送った段ボール箱がいくつもあつた。私はまさに今トランジションにいます。

少し元気をなくしているこのような時期に、私の原点を形成したとも言える麗澤大学での出会いや経験、そして学びを振り返ることは、とても良い機会だと思

う。なぜなら、今の自分に見えなくなっている何か大切なものを見つめなおす機会になるかもしれないからだ。特に私の人生にとって大きなインパクトを与えた大場裕之先生との出会い、そして大場ゼミでの経験について振り返っていききたい。

衝撃的な一言——目から鱗が落ちた瞬間

麗澤大学に入学し一年が経ったころだ。私はサンホゼ州立大学での留学プログラムに参加するため、準備をしていた。ある日、ある授業でのことだった。話の文脈は覚えていないが、先生が学生たちに向かって、「いん石が落ちてきて私たちはいつ死んでしまうか分



ミネソタ大学大学院卒業式にて（2000年）

からない。人生は五分後にはどうなっているか分からないんだよ。だから今を一生懸命生きよう」と言った。この言葉に私は共感し、ぼんやりとしたものではあったが自分の人生哲学や価値観が、その瞬間にぱっとあざやかに変わったのを覚えている。即座に私は、この先生のゼミに入りたい！と思った。これが大場裕之教授との出会いだった。

留学、そして大場ゼミへ

留学を終え、私は晴れて大場ゼミの一員となった。留学で得たパワーを発散できる場所が、私にとっては大場ゼミだった。大場ゼミの基本的な活動は、三・四年生合同の本ゼミと学年ごとのサブゼミ、そして委員会活動、似た研究テーマを持つ学生が二・三人集まって行うグループミーティングなどがあり、とても忙しいが「脳みそに汗をかき、体にも汗をかく」充実したスケジュールだった。当時、大場ゼミには、新会社設立委員会、ディベート委員会、ビジュアル委員会の三つの委員会があった。私はマーケティングに興味があったこともあり、新会社設立委員会に所属し、マーケティング部門のトップの一人となった。

新会社設立委員会とは、一月の学園祭でのカレー屋出店に向けて、一年間の会社設立シミュレーションを行う委員会だった。その中に、マーケティング部やいくつかの部署を作った。マーケティング部門での活動は、マーケットリサーチから始まった。「学園祭に来る人々は、学祭のカレー屋に何を求めるのか？」と

題してニーズを調査した。その調査は学内だけにとどまらず、近くの小学校と交渉し、小学校の家庭科室を貸してもらい、試作したカレーを温め、学祭に多く遊びに来ると思われる小学生に実際にカレーを食べてもらって、感想を聞いたこともあった。私たちは調査の結果、「手ごろな価格の本格的インドカレー」を指すことに決めた。そして商品開発に励んだ。また、台湾でのゼミ合宿の際に、本格的で安価なスパイスも調達した。

一日三〇〇食という高い目標を掲げ、当日が来た。とても繁盛した。しかし思わぬハプニングがあった。私たちは営業を続けるかどうか決めなくてはならなかった。大場先生は、営業を続けなさいとも、停止しなさいとも言わず、私たちを信頼し、私たち自身で決断を導き出させようとしてくれた。そして、ゼミ生が正直に自分の気持ちや考えをぶつけ合い、一晩議論した。そこで出された結論は、営業を停止することだった。とても残念な結果だったが、私個人としては、あの夜一晩真剣に語り合ったことは、とても大切なことを残

した。「正直に自分の気持ちや考えを伝え合うこと。それによって道が見えてくる。お互いの異なる立場や意見をシェアしきること。そうすると、とてもすっきりした気持ちになる」

その次の日の早朝、私たちは店を閉めに、ほとんど睡眠なしでキャンパスに向かった。他の店に迷惑をかけたくないため、学祭が始まる前に片付けてしまおうという考えからだった。片付け後、芝生の上にもみんなで座って食べたモスバーガーが、とてもおいしかった。結果的には成功しなかった会社。だけど、とても充実感があった。私たちはとても真剣で一生懸命だった。そして楽しかった。

大場ゼミでは、卒論の研究を進めると同時に、このような実際の活動からも多くを学んだ。このような体験ができたのは、ゼミ生の主体性や行動力があったのはもちろんのことだが、それよりも大場先生が、学生に自由に活動できる環境を与えて下さっていたからだと思う。大場先生が学生を信用して下さり、学生は与えられた自由の中で責任を持って行動することを覚



大学3年の時、大場先生宅にて。前列右から3番目が海老原さん

えた。大場ゼミは、人から何か与えられるのを「待つ」のではなく、自分から積極的に「ゼミを作る」ことに参加するものだった。このような中で、大場先生から学生への深い愛情を感じ、自ら積極的に動くことにより、人生という限られた時間を大切に生きることを学んだ。生きることは正直とても難しいと思う。しかし、私は生きることと真正面から取り組みたいと思う。一生懸命生きることが、自分の与えられた人生に対する respect を表しているし、自分自身が生まれてきたことへの愛や感謝につながると私は思う。私は生きてゆきたいし、自分や人を愛していきたい。

今の私にとっての大場ゼミ

経験そのものは過去のものであっても、大場ゼミの存在は私にとってはまったく過去のものではない。ミネタで過ごした三年間の間にも、何度も辛いことがあった。そんな時も、ゼミの存在は私を励ました。ゼミの仲間とは、メーリングリスト（まだ全員は加入していないが）や、ゼミOBの有志によって最近作成さ

れたゼミ関係者の交流の場としてのホームページを通してつながることができる。また私たちは、OB・OGと現役ゼミ生がともに学び合える勉強会を開催するという野望も持っている。

大場ゼミは私にとって戻れる場所であり、ともに成長していくものだと思っている。私はこんな宝を持たたことをとても幸せに思う。大場先生、ゼミの仲間、どうもありがとう。

このエッセイでは、麗澤大学での多くの素晴らしい出会いや貴重な経験や学びをすべて書くことはできなかった。あえて麗澤で得た宝の一つである大場ゼミについて書かせて頂いた。そして私は改めてゼミで学んだことやゼミの存在の大きさを心にとどめることができた。この機会を与えてくれた麗澤大学にお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

(財団法人 日本国際教育協会、ユネスコ青年交流信託基金
プログラム・コーディネーター)

国際経済学部 の近況と 卒業生たちの活躍

国際経済学部教授 永井 四郎



(一) 国際経済学部の近況

国際経済学部は、平成四年四月、国際経済学科と国際経営学科の二学科体制でスタートし、この四月で早くも開設一〇年目を迎えるに至っている。この間、国際産業情報学科が平成一一年四月に増設され、三学科による経済・経営・情報の教育体制が整備された。その結果、国際経済学部の学生数は現在四学年で一六〇〇名を超える状況にある。

学部開設以来「グローバルな視点から現実世界を観察し、分析できる能力を持った国際人の育成」を旗印に、各教職員はそれぞれの立場から、全力を尽くして

教育に当たってきた。特に少人数教育を重視する本学の伝統を受け継ぐ形で開講された英語経済書講読Ⅰ（一年次配当必修科目）およびⅡ（二年次配当必修科目）は、クラス授業と呼ばれ、担当教員はクラス担任として学生の勉学やその他諸々の相談に応じる任に当たった。現在もそれは、英語専門書講読（一年次配当必修科目）および専門演習Ⅰ（二年次二期配当科目）という形で引き継がれている。この伝統は、今後もしっかり充実した形で受け継がれて行くであろう。

学部名に「国際」がつけられている理由は、上述の開設理念に基づくものであるが、具体的には、英語関連科目と国際関係の科目が多数開講されていることに

現れている。前者については、一般英語力の向上を目的とする科目の他、外国専門書をテキストに用いた講読や、各専門分野の教員が担当する英語セミナーがある。特に一般英語力の向上には、少人数で、しかも集中的な授業体制が必要とされるが、この点については現在さらなる充実度の実現に向けて計画を進めている。後者について特筆すべきは、国際関連科目の多くが、ヨーロッパ、アメリカ、アジアなどの地域に在任経験のある教員によって指導されているという点である。

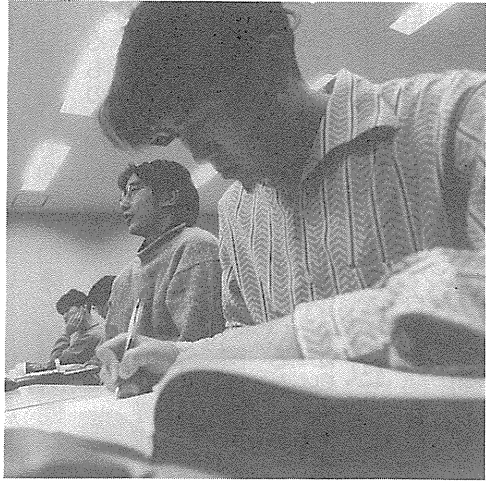
これらの授業を通して学生は、様々な国際性に富んだ刺激を受けるものと思われる。

グローバルな視点に立脚した分析能力を養成する上で、カリキュラム上配慮すべき点は、各学科の履修上のしびりを緩やかにすることである。国際経済学部では、学生が三学科いずれに所属しているかにかかわらず、各学科の基礎専門科目を修得すれば自由に他学科の科目を履修することができるシステムになっている。こうした自由度は、学生にとって自分の関心と将来の展望に沿った、独自の履修計画の立案を可能にするも

のと思われる。

さらに情報関連科目とその教育体制の充実度は、ハード面での整備が国際産業情報学科の開設に伴って要請されてきたとはいえ、対外的にも誇るべきものがある。特にマルチメディア教室における情報機器の充実度は、第一級のものといえるであろう。この教室では、遠隔授業も可能であり、既に実施されている。

大学で学ぶ学生にとって、教員の研究活動は一つの関心事であるはずである。平成一・二年度における国際経済学部所属教員の研究上の特記すべき事柄は、速水融教授の「文化功労者」顕彰および高巖教授の「学長奨励賞」の受賞である。速水教授は「歴史人口学」の確立に貢献したことが顕彰理由であるが、長年にわたる地道な研究が社会的に認められた形となった。高教授の研究は多面的に及ぶが、特に経営倫理の規格を「ECS2000」としてまとめた業績が広く知られている。教員の研究活動は、その下で学ぶ学生にとって大きな刺激となると同時に、大学の教育水準の社会的指標ともなりうるものである。



国際経済学部 — 授業風景

さて、本学がこれまで積極的に取り組んできた課題の一つに、海外からの留学生の受け入れがある。キャンパス内には充実した学生寮があり、留学生に対しては、その寮費は授業料とともに大幅な減免措置がとられている。また毎年恒例となっている留学生歓迎会は、

関係国の大使館関係者を招待して盛大に実施され、留学生たちにとって楽しい一時となっている。また平成一二年一一月には、「ペルー展」が本学国際交流親睦

会(RIFA)によって開催され、クスコ遺跡、ナスカの地上絵などの写真パネル展示、ペルー大使館書記官ルイス・パブロ・サラマンカ・カストロさんの講演、民族音楽演奏などが行われた。こうした状況の下で、このところ別科日本語研修課程を含めて全学的に留学生の入学希望者が増えている。国際経済学部でも、ここ一二年、外国人受験生の増加傾向がみられるが、特に国際産業情報学科において顕著となっている。留学生数の増大に伴って、様々な対応策が全学的に要請される。国際交流センターの拡充や日本語教育センターの設置は、その一環である。さらに留学生数の増大は、カリキュラム上の配慮も必要となってくる。国際経済学部では、一年次必修科目である英語専門書講読を、外国人留学生についてのみ日本語専門書講読で代替可能とする措置をとっている。

平成一二年度現在、大学全体の学生総数約三〇〇〇人の内、一〇%を占める留学生は、一四の国や地域にまたがっており、その結果キャンパスは異文化の匂いを濃厚に漂わせた雰囲気になっている。ただし、言語、

風俗、生活習慣がそれぞれ異なる人々が、同じキャンパスの中で共に学んでいるのであるから、互いに心遣いが必要である。国際経済学部は、社会科学を学び研究する場である。社会科学は人間の行動を引き起こす諸問題を研究対象としていることから、教育現場では特に上記の点についてきめ細かな配慮が不可欠である。学生が自由に伸び伸びとしたキャンパス・ライフを送ることができるような学習環境の提供、これは国際経済学部設立当初からの根本理念であり、これまでそのような対応が常になされてきた。

(二) 卒業生たちの活躍

国際経済学部は、設立一〇年を迎えようとする若い学部であり、卒業生の数も外国語学部と比べれば一握りに過ぎない。卒業生たちの就職先は、製造、販売、観光、運輸、保険・金融、不動産、情報サービス、公務など多方面に及んでいる。

その一例をあげよう。平成八年に国際経営学科を卒業した大谷晴彦君は、学生時代、将来は世界をまたに

かけて仕事をするのが夢であったようであるが、現在の職場はその夢がかない、世界各国からの同社（矢崎総業株式会社）従業員が行き来する中継地点のようなどころであるという。ここでは文化的要因に端を発するトラブルが多く起こるが、それは具体的には双方の相手に対する認識不足が原因となっっているらしいと大谷君は考え、最近では日本の文化を外国人に紹介し、彼らに理解、親しんでもらうことが自分にとっての一つの楽しみになっているという。

在学当時、将来への目標を持ち、それに向かって努力していた学生は、社会に出ても持久力があるように思われる。そういう学生が一人でも多く、国際経済学部を卒業して行ってほしいと願うばかりである。

国際経済学部は卒業生を送り出して六年、国際産業情報学科に至っては、卒業生はまだこれから。こんな若い学部全般を振り返りながら、永井四郎教授に「学部の近況と卒業生たちの活躍」というテーマで執筆をお願いしました。

（編集委員会）

麗澤大学のIT環境と情報教育

— 国際産業情報学科の試み —

高辻秀興教授



大塚秀治助教



ちよつと昔の学生に見る——T(注1) 志向性

ここに一つの興味深い資料がある(表1)。一九九七年に国際経済学部 of 二年生二一四名にIT志向性を問うた調査の結果である。要約すると次のようになる。なお「」内は表1の設問番号である。

(1) 半数近くの学生は語学の学習に最も力を注いでいる「2」。しかしその一方でITの活用への関心も非常に高い「4・11・14」。つまり語学の勉強が優先するからコンピュータの勉強は不要だと考える学生はほとんどいない。なるほど今日ではジェームズ・ジョイスの研究者もヘーゲルの研究者も

情報装備している(注2)。文理シナジー(注3)は時代の流れになつている。

(2) 八割の学生はタッチタイプを克服している「6・7」。五〜七割の学生は学生生活に有効にコンピュータを活用している「3・5・15・16」。世情ではタッチタイプや文書編集や表計算などの初歩的リテラシーの習得は、個人の自習に任せよという声があるが、学生からは意外にも授業でやれというニーズが高い「8・9」。ちなみに平成一二年版通信白書では、一〇代のデジタル・デバイスが指摘されている(注4)。つまりこれらの事実は、入り口部分の初歩的リテラシー

表1 ちょっと昔の学生に見る IT 志向性

設 問		「はい」と回答した割合(%)	
1	将来活動したい分野 (択一)	(1) 語学をいかせる分野	25.7
		(2) ビジネスの分野	22.0
		(3) コンピュータに関連する分野	5.6
		(4) コンサルタント・会計士など専門職の分野	5.6
		(5) 公務員・福祉など非営利の分野	8.4
		(6) 芸術・著作・音楽・デザインなど創作・制作の分野	14.0
		(7) マスコミ・出版などメディア関連の分野	10.3
		(8) その他の分野	8.4
	合 計	100.0	
2	今最も力を注いでいる分野 (択一)	(1) コンピュータの勉強	13.6
		(2) 語学の勉強	45.3
		(3) 経済・経営の勉強	15.9
		(4) その他の分野	25.2
	合 計	100.0	
3	電子メールを、毎日、または2日に1度、または3日に1度利用する	62.6	
4	コンピュータを勉強する理由は、必修科目だからでなく今後必要だと思うから	86.4	
5	コンピュータの利用は、学生生活に役立っている	67.8	
6	ワープロソフトや電子メールで日本語を入力することは苦にならない	84.6	
7	手書きよりワープロソフトや電子メールで書く方が楽だ	50.0	
8	ワープロソフトについては授業でやらなくても個人の学習に任せてもよい	19.6	
9	表計算ソフトについては授業でやらなくても個人の学習に任せてもよい	10.7	
10	語学の勉強にコンピュータを利用している	17.8	
11	語学の勉強にもコンピュータは必要だ	65.4	
12	語学の勉強にもっとコンピュータを利用する方法を知りたい	62.6	
13	経済・経営の専門科目の勉強にもコンピュータは必要だ	79.9	
14	経済・経営の専門分野でもっとコンピュータを利用する方法を知りたい	71.0	
15	レポートの作成にコンピュータを利用している	52.3	
16	図書の検索にコンピュータを利用している	49.1	
17	本気でコンピュータに関連する資格を何か取りたい	52.3	
18	本気でプログラミング言語について勉強したい	30.8	
19	本気でデータベースについて勉強したい	33.6	
20	本気でコンピュータ技術の最先端のことをもっと勉強したい	43.9	
21	本気でコンピュータを利用したマルチメディアについて勉強したい	55.6	
22	本気でコンピュータ・ネットワークについてもっと勉強したい	57.5	
23	もはや物事を好き嫌いで判断するのではなく理性で判断する年齢だと思う	70.1	
24	方法論や体系のある世界より、方法論や体系の固まっていない世界を選ぶ	70.1	
25	「絶対性の奴隷」より「相対性の地獄」を選ぶ	66.4	
26	「麗澤」ということばの意味を知っている	46.7	

(注) 1997年6月時点における国際経済学部2年生214名を対象とした調査による。この時点で学生は次の内容を習得している。タッチタイプ、電子メール、日本語文書編集、ペイント、Webブラウジング、インターネットの基礎知識、2進数・16進数、文字コードとデータ表現、Telnet、FTP、HTML、vi、UNIX基本コマンド、表計算ソフトにおける計算式。

をきっちりやっておけということを物語っている。

- (3) 経済・経営の専門分野におけるコンピュータの活用法を望む声が高い「13・14」。合わせて、より進んだコンピュータの技術を志向する学生が少なからず存在する「17」22」。要するにもっと高次元の情報教育をやれという要望であった。しかし調査時点の国際経済学部の情報関連カリキュラムは、こうした要望に応えられるものではなかった。

- (4) なお七割の学生は、自らをもはや理性的判断で行動すべき年齢であると自覚している「23」。本調査に対する回答も理性的判断の所産と信頼してよからう。

- (5) 一方、七割の学生は、「相対性の地獄」と「方法論・体系のない世界」を志向している「24・25」。作法を無視するという現れだとちょっと困るが、未開拓の分野へのチャレンジ精神の現れだとすると、称えたい。これに呼応して、将来活動したいと考えている分野もさまざまである「1」。さて、こうしたIT志向の若者と社会のニーズに

応えるべく、一九九九年度、本学に国際産業情報学科が創設された。

技学としてのITと情報教育のねらい

1-3 タイプのSEI

社会や自然界の現象をひたすら正確にモデルに描写しようとする態度は、真理探究の態度つまり理学の態度である。どうせ真理は分からない（分かっても不確実性が残る）ので、それはちょっとおいて、むしろ不確実な下でも現実には有効な意思決定を行うという態度は、政策科学や工学の態度である。ところがその場合、内容の貧困な代替案しかないとする、いかに意思決定の手法が立派でも得られる結果は貧困である。そこで内容の豊かな代替案を産み出す独自の領域が必要になってくる。それが技学である。技学は何よりも現実の制約や要因の絡み合いの中で、問題を秩序化し具体的に発想に富む解決案を導き出そうとする態度である。ITはそうした技学の真っ只中にある。

さて、社会における政策決定や企業における意思決定の問題に、技術としてのITを活用して応えられるような文理シナジーのテクノクラートを輩出したい、というのが国際産業情報学科の情報教育のねらいである。第一のタイプは、高度の情報システムを活用できるエキスパート的な人材である。金融、会計、企画、不動産、マーケティング、広告、等々のさまざまな場面での活動が期待される。第二のタイプは、社会科学系のシステム・エンジニアである。ニーズと技術との全方位をにらんで、プロトタイプ・システムを描けるような人材である。特に情報インフラとしてのコンピュータ・ネットワークに強い人材の育成をねらいとしている。第三のタイプは、ITのエヴァンゲリスト（伝道師）である。これは新たな情報技術を活用する途を切り拓いたり、情報リテラシーの伝道を担ったりする人材である。産業振興、教育、研究、起業、コンサルタント、等々の立場で活動することが期待される。平成一五年度から高等学校で教科「情報」がスタートするが、それを

担う教員の養成も射程に入っている。

こうしたねらいの下で、情報教育について、表2（七二ページ）に示すようなカリキュラムを構成した。特徴の第一は、ネットワーク系の教育に力点を置いてある点である。そのためネットワークという科目を設けて、系統的にネットワーク技術を習得できるようOSO（注）アカデミーのコースウェアを導入している。さらにそこで得た知識を実践的に試すことができるよう、専門演習では地域の教育機関を相互接続するNPOの活動に積極的に参加することにしている（後述のKIU）。また特徴の第二は、情報倫理という科目を設けたことである。これは情報モラルとも呼ばれる分野である。情報の意義、知的財産としての情報の保護、ネチケット、およびコンピュータ・セキュリティに関する認識を身に付けるための科目である。

なおここには挙げていないが、国際産業情報学科全体のカリキュラムとしては、この他に経済学・経営学・産業学にわたる多くの科目が配置されている。

表2 情報教育関連のカリキュラムの構成

科目名	単位数	履修年次
情報基礎		
コンピュータ・リテラシー	2	1
情報倫理	2	1
コンピュータ科学	2	1～2
情報処理	2	2～4
コンピュータ・プログラミングA	2	2～4
コンピュータ・プログラミングB	2	2～4
テクニカル・ライティング	2	2～4
アプリケーション開発		
アプリケーション・プログラミング	2	2～4
データベース演習A	2	2～4
データベース演習B	2	2～4
マルチメディア・リテラシーA	2	1
マルチメディア・リテラシーB	2	2～4
マルチメディア・プログラミング	2	2～4
ネットワークング		
ネットワークシステム論	2	2～4
分散システム運用論	2	3～4
ネットワークングA	2	3～4
ネットワークングB	2	3～4
情報システムの活用		
産業情報概論	4	1～4
経営科学	4	2～4
経営情報論A	2	2～4
経営情報論B	2	2～4
統計学A	2	2～4
統計学B	2	2～4
データ解析A	2	2～4
データ解析B	2	2～4
社会情報システム論A	2	3～4
社会情報システム論B	2	3～4
専門演習Ⅰ	4	2
専門演習Ⅱ	8	3
専門演習Ⅲ	8	4

(注) 国際産業情報学科の授業科目のうち、情報教育との関連の深いもののみを挙げた。

IT環境

麗澤大学のコンピュータ・ネットワークは、**図①**（七八ページ）および**図②**（七九ページ）に示すようになっていいる。特徴としては、ネットワーク全体がLANスイッチと呼ばれる高機能のネットワーク機器で構成されており、高速かつ安全な通信が確保されている点である。一般に大学のネットワークは

外部からの不正な侵入がもつとも容易なネットワークであり、セキュリティ保護といった側面は省みられない傾向にあり、利便性や高速性能が追求されがちである。本学では、少々高価な機器構成とはなるが、一定のセキュリティ・ポリシーを実現しつつ高速性能を確保するという手法でネットワークの基盤整備が行われている。学内の数個所に設置されたし

ANスイッチからPC等の各コンピュータまでは直接配線されており、途中の経路でパケットを盗聴したり改竄したりすることができないような配慮がなされている。各LANスイッチ間は光ケーブルを使って接続されており、1Gbit.の高速通信が可能となっているため、通常の利用では通信帯域の不足はない。

一方、インターネットへの接続経路については、依然として3Mbpsの帯域しか確保しておらず、大学が持つべき通信帯域としては、いささか不足気味であることは否めない。現状では、この不足気味の通信帯域をキャッシュ技術などを用いて補っているが、早晚高速帯域のネットワークへの移行が必須と考えている。

キャンパス内のネットワークはモバイル環境にも配慮されており、学生が持ち込むノートPCに対応する情報コンセントや、自営PHS網を用いた構内PHSアクセスポイントなどにより、キャンパス内で自由にネットワークの利用が可能となっている。いずれも、セキュリティ・ポリシーの実現のため多

重認証などの仕組みが用意されており、本学のユーザでなければ利用することはできない。キャンパス外からのアクセスという点では、本学が用意する柏と新宿のアクセスポイントに合計五〇回線以上のアクセスラインが用意されており、自宅や出先などからの利用に対応している。また、商用プロバイダーを経由したアクセスに対応するための仮想プライベート・ネットワーク設備も用意されており、近々利用サービスが始まろうとしている。

教室や自習室の環境も整っており、教室・自習室に約四六〇台のPCが整備されている。自習室は平日午前九時から午後九時まで利用可能で、教室の授業が無い時間は、自由に利用することができる。自習室にはTA（ティーチング・アシスタント）が配置され、利用相談やトラブルの解決に協力している。TAは本学の学生から選抜され採用されるが、総数約三〇名で全学生の約一％にあたる。アルバイトとして採用するわけであるが、技術指導の他、電話対応法や技術支援のあり方やマナーまで、情報システ

ムセンターが講習会を開催して指導にあたる。T A から一般学生への波及効果も勘案すれば、T A 制度の運用自体が教育となっている。

主要なソフトウェアの整備状況と授業での活用状況は、表3(七六〜七七ページ)に示すようになっている。言語系、マルチメディア系、統計解析系、経営科学系、データベース系、と一通り整備されている。地理情報システム(GEO CONCEPT^(注5))を導入した点が一つの特徴である。経営科学や経営情報関連では、今後ITの進展に応じていっそう充実させていく必要がある。また、情報教育関連のインハウス・システム教材として表4(七七ページ)に示すものがある(一部は外部のコースウェア教材)。多くはWebページ対応なので、自宅からでも予習復習ができる。

KIU(柏インターネットユニオン)の恩恵

柏インターネットユニオンは、千葉県柏市とその周辺の教育関係機関を相互接続する非営利の団体で、

財団法人モラロジー研究所と学校法人廣池学園が運用支援を行っている。本学もKIUの運用管理や技術支援を行っている。本学の学生がKIUを通じて、地域の各学校に設置するサーバを構築したり、学校の校内LANの構築を支援したり、サーバ用のアプリケーションの開発を行う活動を行っている。学校ネットワークを束ねる技術は、大学のネットワークを運用する技術にもつながるため、一方的な支援と提供を受けることができる。また、学生が実習を行える場としての学校ネットワークの存在は大きく、ネットワークの構築支援活動は、ネットワーク技術の実習の場となっている。ある意味で、医学部の付属病院的な恩恵をKIUから受けている。先に述べた三タイプのSEのうち第一と第二の部分を実践できる場としてのKIUの存在は大きい。このことは本学の情報教育の大きな特徴のひとつとなっている。

？周遅れのトップランナー―今後の課題―

かつて麗澤大学は情報教育という面では後発であった（？周遅れ）が、今日IT環境の面ではトップランナーである。しかしそれだけに甘んじていると、いつしか別の側面で「？周遅れ」ということになりかねない。最大の課題はデジタル・キャンパス化である。教育面だけに限って言うとな次のような課題がある。

今日多くの大学でシラバスのデジタル化が進められつつある。これは履修要綱をWebページ化するという程度のものではない。ねらいは学生の主体的な学業を支援することにある。大学全入時代は、学内での学生間格差が大きくなると見られている。できる学生をさらに伸ばし、多様な教育内容でダブルスクールの必要をなくし、遅れた学生もそれなりのペースで学業を維持できるようにする、という目標を、限られた教員資源の制約下で達成するにはどうすればよいか、という問題意識が背景になっている。

その一つの方向がシラバスのデジタル化である。予習教材、授業教材、復習教材、発展教材、資格取得教材等々のコースウェアをデジタル化して事前提供すること、履修過程の成果を記録すること、段階的にフォローし個別指導すること、授業時間と授業外学修時間（まじ）とを有効に使い分けること、などが柱になっている。全科目でこれを実施するのは無理だとしても、主要な教科について、適切な教材作成支援者を得て、また指導補助員を得てこれを実施するなら、あながち無理でもなからう。ひとたびデジタル・コースウェアを用意すると、それは他の面でも活用が可能になる。

「？周遅れのトップランナー」といったとき、どちらに針が傾くかは、現在のIT環境をどう生かすかにかかっている。

表3 アプリケーションの整備と活用の状況 (国際経済学部)

ソフトウェアの名称	関連する授業科目
OS, GUI 環境	
MS-Windows2000 Professional	全般
Visio Pro	全般
Xvision Eclipse	全般
DeskTop On-Call for Win95&NT	全般
一般	
TypeQuick	コンピュータ・リテラシー
MS Office 2000 Pro (SR1) (Word, Excel, Access, PowerPoint, PhotoEditor)	コンピュータ・リテラシー
インターネット関連	
Netscape Communicator 4.7	マルチメディア・リテラシーA
Internet Explorer 5.5	マルチメディア・リテラシーA
Adobe Acrobat 4.05	マルチメディア・リテラシーA
LaMail	コンピュータ・リテラシー
FFFTP	マルチメディア・リテラシーA
TeraTerm	マルチメディア・リテラシーA
NetObjects Fusion 3.0	マルチメディア・リテラシーB
言語	
Visual Basic 6.0 (SP3)	アプリケーション・プログラミング
MS Visual J++ Ver 6.0	マルチメディア・プログラミング
MS Visual C++ Ver 6.0	専門演習
Delphi 4.0 J Pro	専門演習
GNU TOOLS (perl, awk, sed)	ネットワークング AB
gcc/g++*	コンピュータ・プログラミング AB
C/C++*	コンピュータ・プログラミング AB
perl*	ネットワークング AB
マルチメディア	
Adobe Premiere 5.1J	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
Adobe Illustrator 8.0J	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
Adobe Photoshop 5.0J	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
Adobe After Effects 3.1J	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
Cameo Ez Vision 3.0J	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
ScreenCam Academic License	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
こんだく太 V4 for スクール	マルチメディア・リテラシーB、専門演習
統計解析・数理解析	
TSP 4.0	専門演習、計量経済学+
SPSS	データ解析A、統計学AB
SAS*	データ解析B
Mathematica 3.0	専門演習
Mathematica Finance Essential	専門演習
Mathematica Technical Trader	専門演習
Mathematica Time Series	専門演習

ソフトウェアの名称	関連する授業科目
経営科学関連	
Crystal Ball V4.0J	経営科学、専門演習
GEO CONCEPT	社会情報システム論 AB、専門演習
ねまわしくん Ver3.0	経営科学、専門演習
QC 七つ道具	経営科学、専門演習
企業家キット	経営科学、専門演習
MS Project98	経営科学、専門演習
データベース	
Oracle*	データベース演習 AB、専門演習
Sybase*	データベース演習 AB、専門演習
Oracle Net8	データベース演習 AB、専門演習
SQLMaker for Oracle	データベース演習 AB、専門演習

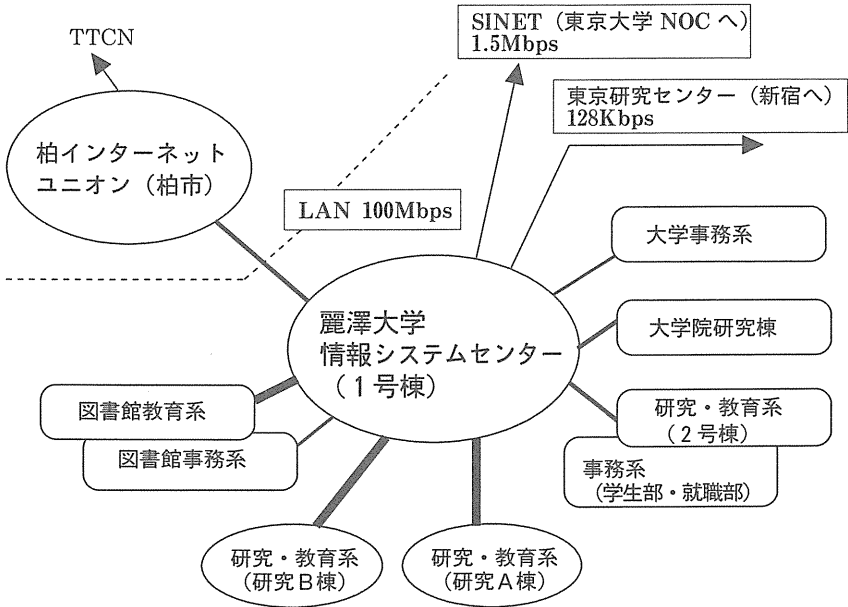
(注) ソフトウェアの名称はすべて登録商標である。*はUNIX環境下でのソフトウェア。それ以外はMS-Windows環境下でのソフトウェア。ここに挙げた以外にもソフトウェアと授業科目はあるが割愛した。+は国際経済学科の授業科目。

表4 情報教育関連のインハウス・システム教材

システム教材の名称	関連する授業科目
1. 文書編集コースウェア	コンピュータ・リテラシー
2. Web ページ作成ガイド	マルチメディア・リテラシーA
3. インターネットの基礎知識コースウェア	マルチメディア・リテラシーA
4. vi 基礎コースウェア	マルチメディア・リテラシーA
5. INFOSS コースウェア*	情報倫理
6. C 言語の基礎コースウェア	コンピュータ・プログラミング AB
7. VisualBasic の基礎コースウェア	アプリケーション・プログラミング
8. 情報処理コースウェア	情報処理
9. Cisco アカデミー・コースウェア*	ネットワークング AB
10. 表計算による数量分析コースウェア	専門演習
11. REISTAT (麗澤大学統計データベース)	専門演習
12. Web アクセス集中管理システム	マルチメディア・リテラシーA

(注) *は外部から導入したコースウェア製品。

図② ネットワーク概念図



注

- (1) Information Technology
- (2) 柳瀬尚紀 (一九七〇)、『ジェイムズ・ジョイスの謎を解く』岩波新書
加藤尚武 (一九七〇)、『進歩の思想・成熟の思想』講談社学術文庫
- (3) 高辻正基 (一九八〇)、『文理シナジীরの発想』丸善ライブラリー
- (4) 郵政省編、『平成一二年版通信白書』きょうせい、九一ページ
- (5) Cisco Systems K.K. (http://www.cisco.com/jp/) GEO CONCEPT S.A. © GIS 製
- (6) ふつう学生は、科目単位当りについて、授業外学修時間三〇時間をとることが予定されている。
- (7)

外国語学部における教育の情報化

外国語学部 外国語・情報教育委員会

委員長 長谷川 教佐（教授）



はじめに

現代の日本では、人々の日常生活の中で、国際化とともに情報化が進展しています。とくに最近では、情報技術の進展を企業のみならず生活のあらゆる面に展開していくことが、緊急の課題とされています。たとえば学生の就職活動などにおいても、企業との連絡が電子メールを通じて行われるなど、情報化の進展はすでに学生のまわりにも当然のように及んできています。

一九九二年、麗澤大学に国際経済学部が設置されて以来、麗澤大学の情報教育も大いに推進されてき

ました。今回筆者に対して、外国語学部における教育の情報化について説明するよう依頼がありましたので、情報教育と教育の情報化について述べたいと思います。

外国語学部における情報教育の現状と課題

まず外国語学部の情報教育について述べましょう。本学部における情報教育を振り返ってみますと、一九八四年頃から選択科目として情報処理法などが開講されています。当時の授業はベーシックという言葉を用いたプログラミンの演習が中心でした。

その後一九九二年に国際経済学部が創設されるに

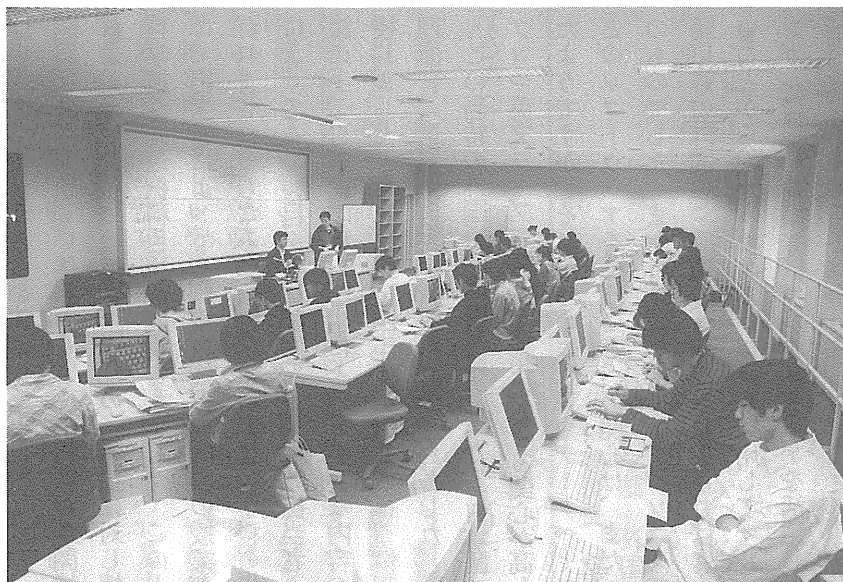
伴い、大学の情報教育の環境は格段に整備され、外国語学部でも新しい体制のもとに情報教育が開始されました。ここでは外国語学部の一年生に対し情報科学概論（選択科目）が開講されました。このときは、担当者によってそれぞれ独自の内容の授業が行われました。ちなみに日本語学科では、学科の指導によってこの科目を全員履修とし、授業担当者と同様の上、日本語学科の学生にとって必要な内容を教授しました。さらに三・四年生に対しては、情報処理演習（選択科目）が数科目開講されました。

この当時の外国語学部の教員の間では、日本語ワープロや英文ワープロなどの使用に対する関心が高かったようですが、それ以外の表計算やデータベースなどのソフトウェアを使うことへの関心は、まだ一部のものでした。また外国語学部では、パソコンで英語以外の外国語や画像・音声を扱わなければならないことから、マッキントッシュを採用してマルチリソナル環境を構築し、マルチメディアを活用した外国語教育への適用をはかりました。

外国語学部では二〇〇〇年度から新しいカリキュラムが施行され、情報教育のカリキュラムも変更されました。これにより一年生は必修科目として、一学期に「コンピュータ・リテラシー」の授業を履修します。現在八クラス体制で授業が行われていますが、そこでは①コンピュータ基礎理論、②コンピュータ・リテラシー（ネットワークを含む）、③情報倫理が教えられています。さらに二学期には情報科学Aが開講され、これは選択科目ですが、ほとんどの学生が履修しています（日本語学科は全員履修を指導）。

二・四年生に対しては、二〇〇一年度から新しい情報処理演習AとEが開講される予定です。ここでは外国語学部の学生にとって必要な、マルチメディア、テキスト処理、多言語処理、データベース、統計解析などの授業が開講され、学生は自分の関心や必要性によって選択して、さらに深く学べるようになっていきます。

コンピュータ・リテラシー、情報科学Aの授業体



校舎1号棟のコンピュータ教室

制の特徴としては、チーム・ティーチングを採用して授業内容の共通化をはかったことがあげられます。とくにコンピュータ・リテラシーでは、授業内容だけでなく試験問題も国際経済学部と共通化しました。このことによって学生はどのクラスで履修しても同じ内容・程度の授業となり、共通化された一定の資質を身に付けることができました。

以上の外国語学部における共通科目の他、四学科においてはそれぞれ独自にコンピュータを学生の教育に活用していますが、筆者は日本語学科に所属していますので日本語学科の場合について説明します。

日本語学科では、学科の学生にとって必要な情報教育のカリキュラムを、前述の学部で共通化された科目を含めて、以下の三つに分けて考えています。

第一は、誰にでも必要なコンピュータ・リテラシーです。これは、すでに述べた「コンピュータ・リテラシー」や「情報科学A」、一部の情報処理演習で学びます。第二には、言語学（日本語学）・文学・日本文化などの研究にコンピュータを利用する場合

の情報教育があります。ここで育成すべき技能としては、言語・文学・社会・文化材料の統計・解析、

音声・画像処理法、データベースの利用と作成法などがあげられます。これらについては「日本文化演習」「日本語学特殊研究(コンピュータ言語学)」や一部の「専門コースゼミ」などで学習します。第三に、日本語教育・外国語教育にコンピュータを利用する場合の情報教育があります。ここで育成すべき技能としては、語学教育への応用コンピュータを使用した日本語教授法、CALL (Computer Assisted Language Learning) 教材の評価と作成、マルチ・リンガル処理、マルチ・メディア処理、ネットワーク環境を使うための技能などがあげられます。これらについては「日本語教育上級演習(日本語教育教材の作成)」や「日本語教育特殊研究」あるいは一部の「専門コースゼミ」や「卒業研究」などで学びます。また情報処理演習などでも、日本語学科の研究に必要な技能を修得します。こうして学生は卒業までに基本的なテラシーのほか、必要に

じて第二や第三のカリキュラムを履修することになっています。

つぎに外国語学部の情報教育に関する今後の課題としては、以下のような点があげられます。まず学生がさらに情報技術の技能を修得できるようにすることが必要です。現在においてもコンピュータに関する基礎知識や情報倫理、ワープロや表計算ソフトの使用、電子メールの送受信、WWWのブラウザなどを学習していますが、いわゆる操作法の訓練だけでなく、コンピュータを問題解決の道具として用いて、思考力や独創性をのばすことが重要です。とくに三・四年生では、自分の研究への活用を促進するようにしなければなりません。

たとえば日本語学科を例にとると、言語材料分析のための実証データによる分析、解析、考察(統計、数量化、画像・グラフ化、テキスト・データベース)に関する科目を設置する必要があります。また日本語教育においても、今後はネットワークの利用が必須となっていくと考えられますが、そのため

トワークに関する専門的な知識・技能を持たせ、またマルチ・メディアの活用や多言語環境に関する知識・技能を持たせることが必要になってきます。

近年、小学校から高等学校段階においても、情報教育が急ピッチで進められており、現在大学で行っている教育内容も、近い将来には高等学校までの段階で既に修得している可能性が高くなります。その動きに対応して、大学ではさらに高度の知識・技能を修得させることができるわけです。これらのことのために、外国語学部でも来年度から情報教育の専任の担当者をおいて、情報教育のレベルアップを図ろうとしています。しかし現在までのところ、学生諸君にはワープロや電子メールの操作法の修得で満足してしまう傾向が見られます。今後のさらなる情報技術の習得への意欲向上を期待する次第です。

教育の情報化

最近、前述の情報教育を含んで、さらに大学の教育活動全般に対してコンピュータやネットワークを

活用していこうという「教育の情報化」が新しい潮流となってきました。たとえば従来の黒板とチョークの講義に代わる新しいマルチメディアを使った授業、さらには遠隔地と結んで行う授業などさまざまな活用があります。従来から視聴覚教育といわれてきた分野も情報技術と融合して、コンピュータを核としてネットワークで結ばれ、さまざまな新しい教育方法が可能になってきています。

教育全体にコンピュータを活用することは、従来から教材をワープロで作成したり、学生の成績管理を表計算ソフトで行ったりすることとして行われてきました。しかし、今回の教育の情報化はそのような授業以外での活用だけではなく、直接教室の中の教授活動に積極的に情報技術を活用していこうとするもので、外国語学部ではこれらの成果を積極的に取り入れて、授業に活用していくことをめざしています。

従来から外国語学部では、語学教育にコンピュータを活用してきました。一九九二年から外国語学部



外国語学部長・水野治太郎教授担当の道德科学の授業風景（2000年10月23日）
本学の1304教室と千葉西総合病院をISDN回線でつなぎ遠隔授業を実施

では、外国語教育に従来のししではなくパソコンを使うことを開始しました。その中心はドイツ語学科で、ドイツ語学習のために毎週マッキントッシュ教室を使用して授業が行われています。そのほかタイ語の授業などでも行われてきました。また日本語学科では学生に対して、将来教育の情報化を進める者としての資質を向上させるため、情報技術を使った日本語教育の教材作成に関する授業が行われています。現在外国語学部では、今後学生が使用する教材を、独自に開発していくかあるいは市販のシステムを活用していくか、またそれらをどのように開発していくかなどの検討を行っています。

教育の情報化に関する他の取り組みとしては、テレビ電話システムを使った遠隔授業があげられます。これはNIT東日本の協力を得て行われたもので、新聞やテレビでも取り上げられたのでご存じの方もあるかと思えます。水野治太郎教授（外国語学部長）が道德科学の授業を、本学の教室と松戸市の千葉西総合病院とをISDN回線で結んで行ったものです。

授業のテーマとして「ガンの告知」をとりあげ、病院の医局において医師と実際に告知を受けた患者が、治療の方針について話し合う様子が教室に中継されました。また当日はガンの告知を受けた何人かの患者の方にも医局に同席してもらい、それぞれ話の後、麗澤大学の教室にいる学生からの質問に答えてもらいました。担当の水野教授によれば、病院からの中継と質疑応答は、患者と医師の限界状況もたらず緊迫感を学生に体験させ、単に言葉で説明されたりビデオで見るとは違う現実の重みを体験させるという効果がみられたということです。

情報技術がどれほど進んでも、授業を行う教員自身がそれを使えなければ、意味がありません。今回は遠隔授業が教育上大きな成果を上げ得るということと、またこのような方面の知識が充分でなくとも遠隔授業が可能であることを示すために行われました。来年度は、他の教員が日常的に遠隔授業を行えるような体制を準備しています。

遠隔授業以外にも、授業への適用としては、通常

の教室でコンピュータを利用することも考えられます。教材の提示などにノート・パソコンを使うと、従来できなかった授業活動を展開することが可能になります。さらにそれらのノート・パソコンをネットワーク利用すればさらに可能性は広がりますが、そのためには教室に情報コンセントの設置などが必要です。現在一号棟の多くの教室に情報コンセントが設置され、そのような利用に対応できる体制が作られています。また教材を提示する場合、パソコンのモニタ画面では大人数の授業には対応できません。そのためパソコンの画面を投影できるプロジェクタも必要になります。これも従来とは違って、教室の照明を消さなくても見ることで出力の大きなプロジェクタが開発され、用意されています。授業ごとに持ち運びできるほど小さなものなので、いくつかの授業においてすでに活用されています。また学生全員が電子メールのアドレスを持っていることを活かして、メーリング・リストを授業に単用している例も見られます。ここでは教員からの単

なる連絡だけでなく、学生同士の連絡や議論にも使われていきます。グループで課題に取り組んでいる場合など、従来は授業時間以外ではなかなかメンバー間のコミュニケーションを取ることが難しかったのですが、これを使って毎日コミュニケーションを行うことができるようになりました。さらに留学生と日本人学生の合同のグループの場合、教室でのディスカッションでは、日本語力の差によって一部の留学生の議論への参加が低調になることがありました。が、メーリング・リストを使って読み書きすることにより、留学生もじっくり時間をかけて議論に参加することが可能になりました。大学に来ない日でも、自宅からアクセスすることにより、議論に参加する学生も増えてきました。

さらに現在委員会で検討しているのは、授業の配信システムです。講義を中継あるいは記録して、いつでも学内はもとより学外のどこからでも聴講できるようなシステムの可能性を検討しています。単に授業をビデオ録画したようなものではなく、リアル

タイムの双方向性を持たせるとともに、その講義風景や提示資料、板書などを一括して記録して教材とするようなことです。この件については、まだその効果や具体的な実現方法について未知の部分が大きいのですが、有効であれば今後早急に準備していきたいと考えています。

以上説明してきたように、一九九二年以来、麗澤大学の情報教育の環境は相当整ってきており、学生の満足感が高いことは、外部の調査でも立証されています。今後はそれを使う学生の知識・技能をさらに高め、また外国語学部の学生に対する教育のソフトウェアの部分の充実をはかることが課題です。

軌跡 太極拳で得たもの

外国語学部ドイツ語学科卒（平成十三年三月）

前太極拳同好会主将 岩佐澄子



今、太極拳同好会は、部への昇格を希望する申請書を提出しています。ついに部に昇格しようとしているのです。去年も部にするという話は上がっていたのですが、同好会としての体制がきちんとなされていなかったので、話が進んでいきませんでした。私はあと数ヶ月で卒業となり、太極拳同好会を去る日も迫ってきています。私が入学した年に太極拳同好会は設立され、共に成長してきたかと思うと嬉しくなってきました。先輩たちから引継ぎ、副将・主将の役割に就くことで、同好会をより大きなものにしていきたいという意識が高まりました。

大学生活で一番熱中した太極拳同好会の活動を振

り返り、書き留めていくことで形に残すことができ、自分なりに整理ができる良いチャンスではないかと思えます。

本気で取り組むようになったのは三年になる直前のとき。それまでは趣味程度にしか考えていませんでした。二年の春休み、太極拳に対する意識が変わりました。麗澤大学太極拳同好会の師範である三代正廣先生と出会い、指導を受けたのです。自分がやる太極拳をほとんどすべて注意されたことにショックを受け、悔しくなりました。しかし、これを機にもっと上手くなりたいと強く思うようになっていたのです。それから三代先生の教室に通うようになり

ました。

初めて出場した大会は、三年のとき、一〇月に行われた県大会。夏休みは毎日練習し、優勝することを目標に必死でやっていました。朝から晩まで太極拳のことしか頭になく、友達と遊ぶことよりも練習を楽しんでいました。

激しく動くスポーツとは違い、ゆっくりとした動作の太極拳は、見る人には簡単そうに見えてしまうかもしれませんが、低い体勢で移動していくことは想像以上に体力を必要とします。大会では集中力、精神的コントロールが大きな鍵をにぎります。日頃の練習も大いに関係してきますが、緊張との戦い、自分との戦いで負けることはできません。太極拳には脚を上げたり、片脚で立ったり、体重移動など数多くあります。緊張すると重心が不安定になり、少しでもぐらつくと減点されてしまいます。コートに立つと一気に体が硬直し、思い通りに動いてくれません。

この初めての大会のことは今でも鮮明に覚えてい

ます。何か月も前から練習を積み重ねてきた結果、優勝することができ、翌年の全日本大会への出場権を獲得しました。順位とともに、満足いく表演ができ、達成感で気分は最高でした。あの緊張感を思い出しながら、後の大会でも頑張ってきました。

全日本大会は、就職活動と重なってしまい、練習不足のまま大会を迎え、不安でした。一〇位以内を目指していて、結果九位だったので安心しました。安心はしましたが満足はしませんでした。もっと練習をしていたら上位を狙えただろうと思いました。このとき感じたことは、努力した分だけ結果となっていて自分に返ってくるということです。自分だけではなく、周りの人や先輩たちを見てもそう思います。太極拳同好会を設立したうちの一人である中沢潤さんは、六人で行う集団競技に出場し、一位となりました。そして二〇〇〇年一月にベトナムのハノイで開催されたアジア武術太極拳選手権大会に出場しました。私たちは自分のことのように嬉しく思い、身近な人が世界の大会に出場することで刺激を受け



2000年4月の全日本大会終了後。前列右から3番目が岩佐さん

ました。

太極拳を通じて、三代先生は私に多くのチャンスを与えてくださいました。一般の人たちを指導する機会をいただき、指導する難しさを知り、自分にも自信ができました。中国福建省の武術隊のもとで習う研修にも参加させていただきました。指導者はほとんどが私と同年代で、日本人とは比較すらできない程、技術や身体能力に優れていたのです。この貴重な体験で、ものすごく刺激を受けました。卒業後、太極拳の道に進もうかと考えたこともありました。

太極拳を通じて出会った人に刺激を受ける度に、自分自身を考える時間を持つことができました。太極拳は精神力を強くしてくれました。まだまだ鍛錬は足りませんが、この先どのようなことが起きてても、太極拳があれば乗り越えていける気がします。そして太極拳は自信を与えてくれました。私は太極拳で自分を表現できると思っています。これからも、自信を持って自分自身や太極拳をアピールできるだけの練習を積み重ねていきたいです。

主将となり、同好会を引っ張っていくことでも学ぶことは多々ありました。周りに支えられることの方が多かったのですが、大会や合宿など全員で参加する行事が沢山あったので、一つ終える度に、やり

遂げた満足感と、同好会がまた一つ大きくなったことを実感することができました。そして今、部昇格を目前に、太極拳同好会は、さらに大きくなろうとしています。

△太極拳同好会活動実績▽

一九九八年度

四月一日 JOCジュニアオリンピックカップ

戸口裕美、中沢 潤、越川 学、

藤田雄也、丸山紀子(五名出場)

六月末 一泊二日 強化合宿(研修寮)

七月一七日 第一五回全日本武術太極拳選手権大会

男子総合太極拳C部門 中沢 潤

〈八月 毎日練習〉

八月二三日 日本太極拳友会二〇周年記念大会

麗澤大学の名で表演

九月 第六回千葉県武術太極拳選手権大会

男子総合太極拳C部門 中沢 潤 一位

男子二四式太極拳C部門 西川知秀 一位

一〇月 埼玉県武術太極拳選手権大会

男子二四式太極拳C部門 藤田雄也 一位

男子孫式太極拳 藤田雄也 二位

一九九九年度

四月一〇日 JOCジュニアオリンピックカップ

男子二四式太極拳A部門 越川 学 六位

女子二四式太極拳A部門 丸山紀子 三位

七月一六〜一八日 第一六回全日本武術太極拳選手権大会

男子孫式太極拳規定 藤田雄也 三位

男子総合太極拳規定C部門 中沢 潤 五位

越川 学 六位

男子二四式太極拳C部門 西川知秀 一〇位

女子三二式太極拳剣B部門 丸山紀子 三四位

九月一〜三日 二泊三日 同好会合宿(研修寮)

九月二六日 第七回千葉県武術太極拳選手権大会

男子二四式太極拳C部門 神尾武志 一位

牧口征史 二位

女子二四式太極拳C部門 鍵和田玲子 四位

高橋里枝

須永美子

一〇月三二日 第八回長野県武術太極拳選手権大会

女子二四式太極拳C部門 岩佐澄子 一位

一〇月三二日 埼玉県武術太極拳選手権大会

男子孫式太極拳規定 藤田雄也 一位

男子二四式太極拳C部門 藤田雄也 二位

二月二五〜二七日 拳友会合宿 同好会全員参加

三月二〜四日 通い合宿 (三代正廣先生指導)

三月一八〜二〇日 強化合宿 (拳友会)

二〇〇〇年度

四月八日 JOCジュニアオリンピックカップ

男子二四式太極拳A部門 神尾武志 五位

女子二四式太極拳A部門 岩佐澄子 六位

鍵和田玲子 九位

寺田 彩 一〇位

久米敦子 一位

荻希恵子 一五位

四月九日 全日本武術太極拳競技大会

男子総合太極拳規定 中沢 潤 一三位

(全日本強化指定選手に選ばれる)

六月二四〜二五日 強化合宿 (拳友会)

七月一四〜一六日 第一七回全日本武術太極拳選手権大会

男子総合太極拳規定 中沢 潤 五位

男子二四式太極拳C部門 神尾武志 三位

女子二四式太極拳C部門 岩佐澄子 九位

集団演武 一位

(中沢潤出場・アジア武術太極拳選手権大会に出場決定)

八月八〜一〇日 拳友会合宿

八月一七〜一九日 同好会合宿 (研修寮)

(八月、九月毎日練習)

九月三〇日 第八回千葉県武術太極拳選手権大会

男子総合太極拳規定C部門 神尾武志 一位

女子総合太極拳規定C部門 岩佐澄子 一位

女子三二式太極拳剣B部門 鍵和田玲子 六位

男子二四式太極拳C部門 牧口征史 二位

女子二四式太極拳C部門 高橋里枝 二位

荻希恵子 三位

及川亜裕美 四位

須永美子 六位

集団二四式自選

(神尾、岩佐、牧口、荻、高橋、須永) 三位

麗陵祭を終えて

国際経営学科四年

平成二二年度麗陵祭実行委員長 紀野篤史



平成二二年度の麗陵祭は、一月の三・四・五日の三日間、開催されました。この三日間で、一、六八六人という麗陵祭始まって以来最高の来場者数を数える事が出来ました。二月の合宿から始まり、一二月の麗陵祭までの間に、様々な経験をj得る事ができました。

まず、過去二年間、麗陵祭に携わってきたのですが、今年になって、自分の立場が変わるとこんなにも実行委員会に対する見方が変わるとかという驚きを感じました。今までは、ひとつの仕事が与えられ、その仕事を達成していけばよかったです。しかし、今年度の仕事は、昨年度まで自分が行っていたよう

な仕事を各局員がうまく進めていけるように、全体を見わたすということが自分の仕事となりました。つまり、実際に企画を作っていく仕事から、全体を見て調整していく仕事が私の役目となったのです。

この事に対して、自分は当初かなり困惑していました。なぜなら、しっかりとした自分の目標とjなる仕事が見出せなかったからです。確かに、麗陵祭を成功させるという確固たる目標があるのですが、二月当初では、その目標が大きすぎ、イメージを湧かせることに苦労していました。しかし、月日が経ち五月頃には一年生も実行委員会に入り、各局ごとに仕事のイメージを持ってくるようになりました。

すると麗陵祭全体のイメージがある程度自分の中で出来上がってきました。その後は、麗陵祭全体として自分が持ったイメージをどのように実現するかという事を目標として、仕事を進めていくことになりました。

そして、麗陵祭実行委員会全体をまとめていく時に、私は常に以下の二つの目をもつことを意識してきました。それは、実行委員会としての目と、一般学生など第三者の目を持つことです。実行委員会としての目は、麗陵祭を成功させるために実行委員として必要なものを見つけていくということです。一言で麗陵祭といっても、実行委員会が行っていることは、とても多岐にわたっています。実際に私が直接的にかかわる仕事はとて少なく、ほとんどが他の委員からの提案や相談などを受け、会議にかけ決定していきます。この時、実行委員会としての目を持ち会議を行わなければ、その提案をした委員の考えをしっかりと汲み取ることが出来ないのです。そして、実行委員の考えを汲み取ることが出来たな

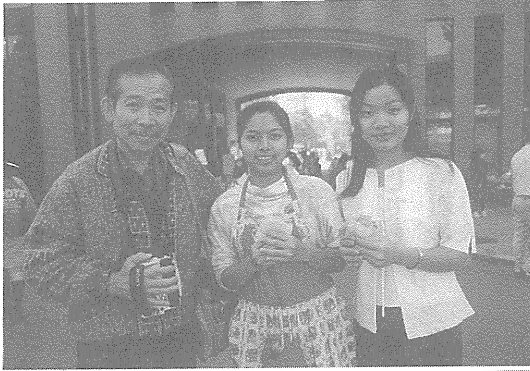
ら、次にその考えが実行委員の個人的な希望のもとに動いていないか、また、第三者の目からみても正しいと思えることを行っているかを見ていきました。

また、自分が委員長として対外的な仕事を多くこなしていくことになりました。それは、学生課で麗陵祭を担当している富塚信治さん、渡邊佑介さんとの話し合い。各業者さんとの話し合い。動物愛護センターの方々との話し合い。委員長として、柏市の手賀沼ジャズフェスティバルの会議に参加させて頂いたことなど、普通に学生をしていたならば、なかなか見ることができない世界を垣間見ることができました。

このような経験を通して思ったことなのですが、社会に出て仕事をしている方と学生では、考えている事の深さに違いがあるように感じられました。「一歩先を見ている」と言えばよいのか、「視野の広さが違う」とでも言うべきなのか解りませんが、何か一つのことを考えるときでも、そのことだけに集中するのではなく、周囲の状況や一歩先を考えてい



オープニングセレモニーで
演奏する「サニーゲイツ」
のメンバー



留学生と先生が記念写真

たてたばかりのお茶を味わう入場者



フリーマーケットもにぎわった

くべきであるということを、口ではなく行動で教えて頂きました。このことは、実行委員長として全体をまとめていく時に話す内容でも、一歩なり半歩先をしっかりと見据えた上で話をするので、より委員会全体としてスムーズに動けるようになりました。

また一学生としても大変参考となりました。

一六四人からなる実行委員会のリーダーとして、人をまとめるという仕事を行っていくことで感じていたことは、どのような仕事をしていくにしても、「人とのつながり」というものがそこには絶対に存在するということです。またこの人と人のつながりというものが、その仕事を行っていく上で最も重要なことであることを強く感じさせられました。

それは、麗陵祭を運営していく上で、実行委員会だけで麗陵祭の全てを行っているのではなく、学生部を始め大学の職員の皆さん、業者の皆さんなど、様々な人の協力のもとに成立しているところにも、「人とのつながり」があります。また、実行委員会内に目を向けても、実際に委員長の仕事というもの

は、先ほども言ったのですが、現場に立って行う仕事というのは少なく、むしろ各委員が現場で行っていく仕事の監督をしていくこと、つまり、「人とのつながり」を確認する仕事が大変多かったように感じられました。一つ一つの仕事に必ず一人の人がつながることになります。そして、全体をまとめていくことは、「人とのつながり」を密にしておくことだと思います。

つまり、「人とのつながり」とは、自分とは違う考えを持つ人とつながっていくことであり、またその「人とのつながり」を密にするということは、相手の考えをしっかりと聞き、しっかりと考えをまとめて行くことなのです。仕事をしていく上で、このことは基本的なことだと認識していましたが、この三年間の麗陵祭実行委員会での仕事を通して、最も重要なことだと自分は感じました。そして今後の学生生活においても、実社会に出ても「人とのつながり」を大切にすることの重要性に変わりはないと思います。

麗陵祭に出展して

宮澤賢治を学んで

国際経済学部

平成二二年度

丸山康則 ゼミ、

「今年の麗陵祭には何を出そうか？」

「宮澤賢治にしようよ」

そして準備が始まりました。ゼミで勉強はしていたのですが、新しい情報も加えて、ということと、花巻へゼミ旅行もし、材料集めもしました。

本当に嬉しいことですが、協力してくださる方々が次々と登場してくださり、これも賢治さんの力と感激した次第です。

花巻の吉田精美先生は、花巻在住で賢治の妹トシの母校で数学の先生をしておられた方で、全国の宮澤賢治の碑を調査して本にまとめられました。花巻の勉強に行った時、越後美智子さんとボランティア・

ガイドをしてくださいました。千葉県柏市の小野倉さんは、ゼミで話もしていただき、賢治のパネルや資料を貸してくださいました。花巻で見た大壁画を製作したシャインアート社の坂本さんは、写真やスライドを送ってくれました。花巻の観光協会の伊藤さんは花巻のパンフレットを、また賢治の作品が国語の教科書にどのように使われてきたかを丹念に調べた都留文科大学の牛山恵先生にも貴重な資料を提供していただきました。またイーハトーブセンターの高橋さんからも貴重な資料を送っていただきました。

毎日新聞の「読書世論調査」は、昭和二二年から

毎年行われている調査で、すでに五四回を数えています。大人が調査時期一カ月間で読んだ本で、賢治の作品を良かったとあげることはほとんどありません。もっぱら子供が良かった本としてあげているだけです。それが二〇〇〇年に行った大人への調査で「この二〇〇年で心に残る作家」となると、賢治は一七位にあげられています。朝日新聞による「この一〇〇〇年でのすぐれた文学者」では、夏目漱石、紫式部、司馬遼太郎に続いて四番目にあげられています。

海外にもようやく知られるようになり、英語で五六種をはじめとして、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、など多くの国に紹介されています。

二一世紀、賢治の作品はますます多くの人たちに読まれるでしょう。あの夢の国イーハトーブは世界の夢となって広がっていくことでしょう。

日本人にとって、宮澤賢治は心の地下水のように何時までも流れつづけると思います。

また、花巻への旅の中で訪れた後藤新平（水沢市）、

新渡戸稲造、高村光太郎（花巻市）も「東北の偉人たち」として加えて展示をしました。

なお、資料として、「年表・作品表」（福島章）

「雨ニモマケズ」「生徒諸君に寄せる」「農民芸術概論綱要」を来られた方々にお配りしました。

二日間で多くの方々に見ていただきましたら、感想を書いていただくようにしておりますたら、約一五〇人ほどの方が書いてくださいました。それは私どもにとって、とても大きな励みでした。次にそのうちから一〇人ほどの方々のご感想を掲げます。

●「皆さんが足を使って調べた様子が見受けられます。すばらしいと思います。」
（四一歳女）

●「あらためて宮澤賢治の世界に感じ入りました。」
（三三歳女）

●「スライドがとても綺麗でした。ビデオや絵も楽しかったです。」
（二一歳女）

●「しっかりとゼミ活動をしているんだな、と感心しました。」

● 「よく展示されている。内容が充実している。」

(七〇歳男)

● 「ハイレベルな授業が展示の中から感じられます。」

私も行きます。」

(四九歳男)

● 「賢治の本はけっこう読んでいます。人のために生きることを選んで生きた素晴らしい人だと思えます。」

(男)

● 「昨年も見せてもらいました。宮澤賢治の人間としての豊かさに感動します。視野の広いゼミで、学生さんもまじめで感心しました。」

(女)

● 「丸山ゼミ、みごとにフィールドワークですね。」

(二三歳男)

● 「娘(麗澤大二年)に勧められて入室しました。小学校の頃、『雨ニモマケズ』を知ってから何十年。もう一回彼の本を読みたいと思います。日曜日、感動的な時間をすごさせていただきました。感謝します。ありがとうございます。」

(四九歳女)

△平成一二年度 麗澤大学国際経済学部

丸山康則ゼミ▽

四年生

大崎優子、尾形夏鈴、篠田幸子、鈴木亮司、

武田 桂、中村明博、福原篤生、前田雄史、

前田幸大、矢野 恵、山口夕佳里、山本眞己

三年生

甘利朋子、今関光野、川島拓人、小林絵美、

佐藤可織、柴田周作、高橋隆一郎、福井泰輔、

堀井陽子、八島千恵、湯元知佳、吉田保幸

編集後記

◆本号編集作業の真つ最中に、速水融先生が文化功労者に選ばれ顕彰されました。早速ご寄稿をお願いしましたところ、快く引き受けてくださいました。玉稿をタイミングよく本誌に掲載できましたことは、編集子の深く喜びとするところです。◆本号は、△特集▽・△オビニオン▽・△麗大の今▽という三つの柱を基本に編集しました。ご協力くださいました執筆者の皆さま全員に、心より御礼申し上げます。◆△特集▽「卒業生、麗澤を語る」には、一二名の卒業生の皆さまから玉稿を頂きました。結果的に、学部・学科や男女のバランスがとれなかったところもありますが、ご容赦ください。卒業生の皆さまには、今後時々、ご寄稿をお願いする予定です。◆表紙のデザインを新しくしました。◆本誌の編集委員長は、創刊号から第六号まで一貫して、水野治太郎教授が務めてこられました。水野教授が外国語学部長に就任されたため、編集委員会のメンバーが左記のように変わりました。今後も、ご愛読くださいますよう、また、ご感想やご提言をお寄せくださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。(Y・S)

麗澤教育編集委員会(平成一二年度)

委員長・鈴木康之(外国語学部)

委員(外国語学部)・望月正道、黒須里美

委員(国際経済学部)・中野千秋、堀内一史

事務局(広報課)・島瀧貞幸、米田隆彦

『麗澤教育』第七号

二〇〇一年四月一日 発行

編集 麗澤教育編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二ノ一ノ一

電話 ○四七一―七三―三〇三〇

印刷所

昌美印刷株式会社

東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七
電話 ○三一三六九〇―三一九六